

土

淨

號 月 六

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年五月廿日印刷納本・昭和十七年六月一日發行

第八卷 第六號



金

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓五十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に随喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村辨康著

日常勤行式講讀

信仰の入門書！

座右に備へて日常

勤行の深意を味得

し、以て各自の修養に最適です！

毎日お勤めをするお經文の一々に懇切

な解説がついてゐます。即ちお經文に

和譯と意譯をあげて字解までつけ信仰

の深底を縷々述べられてゐます。

誰にでもよく判る佛教書！

一讀して信仰の何なるかを解

し得る絶好の書です。

B 6 版二百四十頁
價 一圓五十錢
送料 十二錢

著 夫 幹 本 山

想思體國がわと教佛然法

わが國體思想からみた

法然佛教の新しい基礎づけ

神國日本の教法として開創された

法然佛教を歴史的に解明した時局

下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つ

て初めて萬民翼賛の教法として現

れ大成されるまでを總ゆる資料に

より解明されてゐる。

わが國ならではのと思はしめる新宗

の開創の根源

を説いて餘り

なし。

A 5 型クロス装
價 二圓二十錢
送料 十五錢

淨土 六月號 目次

表紙・扉・目次カッパ

鈴木金平

遅しい大國民の行

大野法道 (四)

白牡丹

吉田絃二郎 (一四)

隨筆法

藤原了然 (六)

福田行誠

結城素明 (一六)

上人特輯

芝蓮山人 (三)

新興

生田花世 (九)

繩跳運動の指導

出口林次郎 (一〇)

再信

高橋安子 (一五)

信

中村辨康 (一三)

小説遣

小島健三 (一四)

淨土まんが(時局報告)

漫畫協園 (四)

歌

興謝野晶子選 (一七)

俳

太田耳動子選 (一五)

法語解説

中村辨康 (一五)

救ひはただ一つ

編輯の後記 (一五)



淨土 六月號

まめやかに往生の志ありて、
彌陀の本願を疑はずして念佛を申
さん人は、臨終のわるき事は大方
は候まじき也。

それを意えぬ人は、みなわが臨
終正念にて念佛申たらむ時に佛は
むかへ給ふべき也とのみ意えて
候は、佛の願をも信ぜず經の文
をも意えぬ人にて候也。

法然上人御法語





歎佛偈講義……三……

遅い大國民の行

大野 法道

戒・聞・精進・三昧智慧

威徳侶なく殊勝希有なり

これからの二偈は佛徳の行と證とを説くので、つまり佛の生活を語るのである。佛の尊嚴なる所以は、それが常に生きてゐて、生活するものだからである。正しく張り切つた生活に、どこまでも進みゆくのが佛の徳である。その生活の有様がこれから説かれる。その中でこの一偈はまづ佛の行である。

行と云へば、何だか特別の難かしいことでもするやうに聞える。昔は行者といふものがあつて、普通の人では逆もできない難行苦行、又は荒行をしたと傳へられる。役行者

が、大和の大峰山に籠つて、岩根こぼしい山中で修行した話、文覺上人が紀伊の那智の龍で荒行をした話は有名である。大津の三井寺へゆくと、本堂の前に五貫目もあらうと思はれる大きな鐵の足駄と、太い錫杖が置いてある。むかし或る行者が使用したものだと言ふことである。

これらの話でみると、行と云ふものは並み大抵ではないむづかしいもので、人なみはづれた體格と精神力がなければつとまらぬやうであるが、實を云ふと行はもつと廣いもので、正しく緊張した生活なら、それはみな行なのであるから、日ごと日ごとのあらゆる行ひが、おろそかならぬ心で爲されるなら、それは皆、立派に行になつてゐるのである。

去年頃から種々な集團で禪の行といふことをやり、また

鍊成道場なるものが開かれるやうになり、そこではたとへ一分間たりとも、ムダな隙き間なく、規則號令に一身を嚴持し、澄んだ心に一心を淨化して、身心を鍛鍊するのである。それがいかに大戦下に處すべき國民の覺悟を確實にし、いかなる苦難にも耐えぬ力を養ふに有效であるかは云ふまでもないことである。但し之はどこまでも日常の三百六十五日を、打ち出す本となるべきものである。いつの間に知らぬうちに溜つてゐる、日々の生活の中の塵芥を取り去る大掃除なのである。

二

行のすがたは數限りなく澤山あるわけであるが、いま此偈では五つ擧げてある。

佛徳の行の第一は「戒」で、之は何事にやらす物事を大切にすることである。

佛徳の戒は、よく戒律といふ言葉で顯はされるので、何だかやかましい規則があつて、それをキチンと守つてゆくことが戒なのであると、思ふ人があるかもしれないが、戒はそれよりもつと大きい廣いものである。人間が朝起きてから夜寝るまで、常に何事でもおろそかにせず、大切にす

ことである。今のやうに大戦下にあつては、食糧はじめ種種の物が缺乏してゐるから、たとへ大根の葉のやうなものでも捨てずに大切にす。またわが身も一億國民の一人として、大東亞の建設に及ぶかぎりの力を出さねばならぬと思へば大切にす。

もつと大きく云へば皇國日本を大切にす。これらは皆戒を持つてゐる姿である。

大切にすることを分けてみると、慎みと勵みとなる。

よく電車の中で見うけることであるが、満員の壽司づめになつてゐる所へ、急に降りる人があつて空席ができた。丁度その前に立つてゐる若い人が、知らぬ顔して自分で掛けるでもなく、他人がそこへ行くにもゆけぬやうに邪魔をして、吊り手を取つて平氣で立つてゐる。この若い人は慥かに慎みを失つてゐると思ふ。このやうな事はまことに些細な、どうでもよいやうなものゝ、一事が萬事、この大戦下のムダを省いて能率を擧げねばならぬ時に、満員電車に一つの空席を無理に作つてゐる人の心が憎らしい。自分の爲めを計つて他人の迷惑になることを平氣でやつたり、腹黒いことをたくさんしたり、極端に云へば國策を通り越したりして、慎みを缺いてゐたのでは、榮譽ある日本

人の本分にそむき、お國の躍進にブレーキをかけるものである。何の面目あつて、お國の家庭に住み、お國の道を歩き、お國の汽車や電車に乗ることができやう。

勵みは物のぬうちを磨き出すことである。一身について云へば、自分の性能に自信を持つて、どこまでもやり抜くのである。人はその顔形が異なるやうに、誰でも他人の追従を許さぬ特長を持つてゐるから、それをいやが上にも發揚するやうに勤める。まして今日のやうな時代に生を受けたからには、一億の國民はこの勵みを以て、ひそかに聖業の大海の一滴たらんとするだけの自信を持つべきであると考へる。

かうした人間の持つべき慎みと勵みの、抜け目のない強いものが、佛の行たる戒である。

三

佛の行の第二は「聞」で、委しく云へば多聞である。何事に限らず多くを聞くことである。

畏くも 明治天皇は五ヶ條の御誓文に於て、「知識ヲ世界ニ求メ 大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と仰せられた。この廣く聞き取るとは、萬代に變らぬ正しく生きる道である。

これからの日本は大東亞を指導してゆくべき、光榮に満ちた重大なる責任をもつとともに、國民たるものは、それに相應するだけの大度量を備へねばならぬが、それには先づ多聞であるべきだと思ふ。他人の言ふことに耳を貸さず、自分の考へだけにこだはつて居るのは、頑固であり、わけの判らぬ人である。そのやうな量見の狭いことでは、何時までもゆるやかに生き伸びられるものではない。必ず行き詰る時が来るに定まつてゐる。

日本精神はこの多聞の性格をもつて廣大無邊なものである。外國のものでもそれを適正に取り用ひ、本來の惟神の道に照してお國を養つてゆくものが日本精神である。その度量の廣く大きいことは實に世界に類例を見ないのである。さればこそ日本は生々として、どこまでも伸びてゆくのであつて、之はつまり多聞の性格から來るのである。もし日本精神を以て、たゞ國內だけのことで見て、外來のもの嫌ふやうなのは、この精神の大きさを知らぬも甚しいものと云はねばならない。

但しこゝに注意せねばならぬのは、たゞ多く聞くだけではなんにもならぬことである。聞くとともに聞き分けねばならぬ。自分で聞いたものゝよしあしを見定めねばならぬ。

ぬ。このことは第四の「三昧」にゆづる。

四

佛の行の第三は「精進」である。この語は世間にも使用されるまでに普及してゐるが、世間では一生懸命に勤めはげむ意味に用ひるやうである。大體それでよいが、もつと穿つてみると、たゞわけもなくやり切るだけでは精進にならない。横車を押したり、國のため人のためにならぬ事は、いくら勤め勵んだとて精進とは云へぬ。

精進は必ず誠の心に立たねばならない。誠ごころが本となつて精進だすところに精進がある。自分は此仕事で行けばよいのだといふ自信に誠は宿る。そこからは喜びが湧いてくる。勇みが出てくる。喜び勇んで仕事をするから進歩する。

いよ／＼ますます仕事が目白くなる。これが精進である。佛の行の第四は「三昧」である。日本では火葬場のことを此語で呼ぶ地方があるし、また研究に専念してわき目をふらぬのを研究三昧に入つてゐるとも云ふ。之はもとは梵語で、種々な意味が含まれてゐるので、適當な譯がないから、原語のまゝで用ひることになつてゐる。

三昧の意味の第一は生活の落付きである。何ものが來て心を亂さうとしても、その爲めに心を奪はれず、事に當つて徒らに動じないことである。心がそは／＼して落付かぬのでは、何事も成就しないのは云ふまでもなく、あはてる爲めに飛んでもない失敗を招くことは、數へきれぬ程澤山ある。ましてこれからの大東亞の天地に打つて出るべき大國民としては、根本に落付きの修養が必要なるは明らかである。第二に生活の統一である。落付きは釘づけとは違ふ。時により場合によつて適正に應ずるものであらねばならぬ。わが生活の根本に落付いて、すべてをそれに集中してゆくのである。そこに本當の熱中があり、しかもゆるやかさがある。第三に生活の活力である。落付きは無氣力とは違ふ。本當の落付きは活力素として張り切つて生きてゐる。廣い領土を持つ國必ずしも大國ではない。國民に活力がなかつたら、いつかは開いた花が散るやうに、凋落の運命に遇つて壊れてしまふからである。わが領土は世界の七つの海を支配する」と誇つた英國が、今現にその運命を辿りつゝあるのが何よりの證據である。されば大東亞が本當に大となるには、そこに住む人々の生活に、斷えず活力が満ちてゐなければならぬ。

「三昧」とは本當に落付いて徒らに動ぜず、火も焼く能はず、水も漂はすことのできない、生活の根を下ろすことである。

五

佛の行の第五は「智慧」である。人間には猿智慧といふものがあつて、小賢しく立ち廻ることがある。また種々なことを澤山知つてゐるのは智慧のやうにも見えるが、これらは共に本當の智慧ではない。別に大したことを知らずとも、自分の行くべき本道を見定める力さへあれば、それは立派な智慧である。いかに賢く立ち廻つても、後になつてきれいな上塗りがはげて、下からぼろを出すやうなのは智慧のない證據である。他人の知らぬことを澤山知つて博學に誇つても、それをこなす力がなければ、荷物を澤山背負ひ込んで、反つてそれが邪魔をして、思ふやうに樂に歩けぬやうなのは、やはり智慧のない一例である。

更にまた我々の目の前に廣げられてゐる大東亞戦争の結果からも、智慧の意味が見られる。敵國の米英がすべて物の多い少いで力を定め、自分らが澤山の大きい軍艦を持ち、物資の多いのを恃みとしたのに對し、わが日本は、海

軍で云へば五五對三の比率であるから、物の多少ではなく、人の精神力と錬成で行くべきだし、早くから實戰さながらの猛訓練をやつた。それはかりか、榮えある歴史に輝く、皇軍の傳統精神を磨きつゝあつた。どちらが本當の智慧であつたかは、開戦以來の戰果が、何よりも正確にそれを判斷してゐるではないか。

以上を讀まれた方は氣付かれたであらうが、佛の行の五つを説く經の偈を、今こゝでは人について語つた。中には、佛の行は人のものとは全くかけ離れた、想像できぬ程の勝れた尊いものである筈と、異様に感ぜられる人もあるかも知れぬが、實は人のものも佛の立派なものゝ外に、別に佛の行はないのである。偈に「威德侶なく殊勝希有なり」とあるのはその意味であつて、人の行が先づなければ、この二句は出てくる餘地はないのである。人に依つて佛を説くことのできるのが、元來、佛教の他の宗教とは違ふ特色なのである。

況して、大東亞共榮圈を指導すべき皇國日本人として、持たねばならぬ正しい大國民の行の内容を、仰ぐ光の佛徳に見出しうるに於てをやである。



新しん興こう滿まん洲しゅうの姿すがた

生 田 花 世

一

滿洲から歸つたばかりの私のところへ、北滿の鐵驛てつえきでお目にかゝつた青年義勇軍訓練所の寮母さんの中川さんからお手紙が來た。あけて見ると、書信の外に、短歌が五首入つてゐる。

すらくと伸びよ若竹滿洲の

希望の丘に終溢れて

下の句は、私の一寸改めたものである。鐵驛訓練所のあるところは、鐵驛の驛から、二十數丁はなれた場所の丘陵の上なのである。こゝに、青年義勇軍が、希望の訓練生活をいとなんでゐるのであるから、希望の丘と云つてよいのである。

滿洲へ、關東州の大連から入ると、苦力や

商家の滿人がおびたよしく目につき、大混雜を呈してゐる姿におどろかされる。

『こんなにも滿人は居るのか』

と呆れる位ゐるのである。奇妙な事には、

青年の姿があまり目にうつらない。大凡中年老年の人々のみである。従つて、滿洲の表玄関からは、新興滿洲の姿を見定めることはむづかしい。

新興滿洲の姿を見るには、滿洲の表玄関より、横入口の東滿から、北滿の方を見なくてはならないのである。

冒頭にあげた鐵驛は北滿の相當、奥の方である。こゝへ行くには、大連、奉天、新京、ハルビン、牡丹江、佳木斯を経由するか、圖門、牡丹江、佳木斯を経由してゆくか、この二線によるのだ。この二線の左右には、こゝにも、かしこにも、青年義勇軍の大小の訓練所が散在する。

訓練所の最初のものはハルビン郊外のものださうであるが、時勢に驅り立てられて、北滿の呼吸は急に生き生きとして來た。元氣な

若い大和民族が、次々と渡滿し入植して、大地とともに新興の意氣に燃え立つてゐる。

三月三十一日の夜の事であつた。ハルビン驛の午後九時すぎ、そのむかし、伊藤公遺難の悲劇をひめるこの驛の待合室に、百二十三人の青年義勇軍が、發車時刻を待つてゐた。中央の腰掛の三分の一はこの青年たちで埋められてゐた。

旅人の私は、一隅に腰かけて、おつと見てゐた。

故郷にゐたら、まだ甘えても見たい年頃の十五歳の小さい兒も五六人まじつてゐる。何れも作業帽の幟章に黄の櫻花一輪をつけてゐる。中の七八人は、何れも、肩と肩、胸と胸とをもたせかけ合つて、すやすやと眠つてゐる。若いながらも、旅路に疲れた姿だ。しかしこの青年たちの頬は、清い赤い血の色に匂つてゐて美しいのであつた。

中の四五人は、まるで、若詰のやうに群れて、一人が立つと、みんなついて立つ。一人が歩くとみんな同方向へ歩いてゆく。行くも

歸るも友とともに、「生きるも死ぬるも友とともに」といつたやうな血盟の友情を見せてゐる。



新京神社前の筆者（中央）

おもへば、青少年は、十三歳、十四歳、十五歳位から、男としての本能の芽立をおぼえつつしか、母の傍からはなれて、友の傍へと

走り寄つてゆくものだ。さうした青少年の成長過程からいへば、母の傍を遠くはなれてゐるからと云つて、これらの青少年をあはれんではならぬ。これでいいのだ。

青少年は、友情によつて生きられてゐる。友さへ一緒にあれば、どんなところへも淋しくなくて行く。一人なれば泣きさうな兒も、友があるので、心つよく、まつしぐらに、行くべきところへ行く。この青年たちの入植地はどこであつたか聞かなかつたが、何れにしても北滿だ。北滿の大地は、新興のために大和民族の若々しい血を、こんなにも必要としてゐるのであつた。

二

若き滿洲の動脈としての渡滿日本青少年の意氣軒昂に刺戟されて、滿洲青年はどの程度までふるひ起つてゐるか。

私は滿洲にて滿人青少年の學校を見たかつたが、旅程の都合にてそれが出来なかつた。たと一つ報告の出来る事は、私が奉天に入

つた日に、奉天市の青少年全部が、行列を組んで、それぞれ集合し、奉天神社に参拜するに出逢つた。それは、大東亞戰第二次戦捷祝賀の日であつたのだ。

教へられなければ、それが、日系青少年であるか、満系青少年であるか分らない。それほどに、制服姿の青少年はひとしく見えるのであつた。もつとも、土地の人は云つてゐるその歩きつきにて、満系と、日系とは大分判るのだと。

教育を今受けつゝある満洲青少年は、その眼が冴えやかである。町のそこで見かける満洲青少年の眼光は鈍い。こんな事が私に分つた。

青少年の行列を、大連の町で見たとき、私の傍に、満洲青年が一人ゐた。星が浦遊園地へ行くのに、案内のため、同行の人が、この青年をつれて来てくれたのだつた。

五六十人の日系青年の通過を見送つた後で『満洲の青年方も、あんなにして訓練を受けますか』

ときいて見た。

『學校へ行つてゐるものはしますが、さうでないものは、あんなにしません』

日本語は上手なので、よどみなく、かう答へた。

『どうしてですか？』

と私は訊いた。

『面子があるのです』

かういつてから、

『訓練される事を皆、好きません』

と平然と云つた。

私は、驚いて、この満洲青年の顔をちつと見て

『妙な面子ですね』

『上から何か云はれること、みな好きませ

ん』

と彼はもう一度くりかへした。

満洲には、かうした奇妙な面子といふものが、町の大凡のところに潮流をつくつてゐる事が知られた。

何といふくだらない面子であらう。私は、

『訓練を受ける面子に改めたいですね。大東亞戰の時代だから……』

と云つた。

満洲の教育者(學校關係の人も、町の心ある人も)は一日も早く、關東州、満洲の人々の中からかうした時代をこゝろえぬ面子に生きる人々を發見し、これを教化しなくてはならぬ。

満洲の新興勢力の妨害をするものは、上にあげたやうな面子の傳播者なのである。折角學校で、青少年に、進取の訓練をしても、學校をひけば、ヘンテコになつて了ふのでは何にもならぬではないか。

満洲から、日本へ留學に來てゐる青少年處女は、東京で、今放々として勉強してゐる。かうした人々の明日の使命こそは、満洲に歸つて、奇妙な面子に毒される青少年を引つぱり進むのでなくてはならぬ。

満洲は、人も知るとほり五族協和の國である。滿人、漢人、蒙古人、白蒙西亞人、日本人(半島人をふくむ)五族青少年が何れも

こそつて、大東亞人にふさはしい人物となり
次代を背負ふべきである。

まへにのべた奉天の、大東亞第二次祝賀
の日に、私は、白系露人の青少年の百二十
人の行列を見た。この人々は、身長高く、色
白く、すばらしく立派な風采であつた。きく
ところによると、何れも温和にて、技能の方
面に、進路を見出し、工業學校を出て、満鐵
などの技能方面に進出するのが多いとの事であつた。

三

日本であらうが、満洲であらうが、希望を持たない人のところに新興はない。

満系の若人たちはもつともつと公的の希望といふものを握んで生きなければならぬ情勢に迫られてゐる。これは満洲の若き女性についてとひとしく云つてよい事である。

満洲で見かける満系の若い女性の大部分は眞に生きる事、子を生む事以外に、何の發展も示してはゐないやうである。満洲の少女の

集女學校を見學するといふ事が出来なかつたのは残念であるが、私の近くの町の牛込寮（女子留學生寮）に来てゐる少女たちから考へると、薰陶よろしきを得ると、優秀の女性の生れる事は確實である。牛込寮では年々留學の女性の質のよくなる事を當局者は喜んでゐられるのだ。

全滿を歩いて、私の考へた事は、日系青年子女のためにも、満系、漢系子女のためにも、もつといふ學校の多數設けられる事である。子女の勉學のために、渡滿の邦人たちは本當に悩んでゐるのを方々で聞いた。

次に、若き満洲に必要なのは信仰生活の充實である。

滿洲皇帝陛下には、特にこの點に深甚の御希望を語られると洩れ承る。

新しく建設される國土の人に、信仰生活がなかつたならば、砂の上の機關にひとしい結果を生みやすいであらう。

満人の宗教には、回教其他である。しかしこれらの宗教は、どうしても再検討して、も

つと、大東亞狀況にふさはしい内外の革新を必要とするであらう。

渡滿邦人の宗教は、神道と、佛教と二つの流れが日を追ふて成長してゐる模様である。開拓團では、どこでも、まづ、社を新設してゐる。

千振、彌榮、龍爪、樺林などの高いところに、神々しく鎮座します社は、小さいながらも、開拓地らしい瑞氣を放つてゐた。

佛教の方は日本にあるだけの宗派がそれぞ

◎是非御試用下さい

にんにく粉末

固形にんにく

山田中將湯

神傳五藏湯

特約店を

大募集中です

益々元氣旺盛

静岡市上香谷町
神谷昌孝

電話二八六三番

れ入つて行きつつあるが、開拓當局から優遇されてゐる宗派よりも、さして優遇されないでゐる宗派の方に、弘法の熱心な僧がゐて、開拓團のために、いろいろと奔命してゐるのを見た時、一つの眞實を思はせられた。

『乏しいもの、貧しいもの、みち足りぬものの中に、本當の努力心が燃えるものだ』

この事は、宗教ばかりに云へる事でもないが、滿洲で、特に、ハッキリ、この事がおもはれたのである。

私は三月三日東京をたつて、三月十日に大連につき、大連、撫順、錦州、奉天、新京、哈爾濱、牡丹江、樺林、龍爪、佳木斯、鐵嶺、綏化、齊齊哈爾、吉林と通過した。

私としては一生又とは出来ないやうな大旅行であつた。

種々見學すると同時に、滿鐵の婦人社員、社員夫人、看護婦、滿洲炭業株式會社、滿洲重工業株式會社、滿洲國際運輸株式會社等の婦人社員に、東京の銃後生活、隣組、防空の事など一時間話し、そのあとで、三十分位、

隣組常會式の懇談會の進行をして、私が去つても、上手に、懇談會の出来るやうに、コッをおしらせしたのであつた。

話の間に、信仰生活へのおすゝめをしておいた。

私も信仰の上では、修業中のものであるが、年をとつてゐる體だけで、そんな事もしたのであつた。

開拓團で話をする時には、渡満して、すでにこの土地で墓となつてゐる人も多いので、村民と一緒に、この先人の墓のある方を遙拜する事を、國民儀禮のちに爲したのであつた。

ら、かう呼びかけてゐるにちがひなかつた。
「しつかりやつておくれよ！」
滿洲の新興、滿洲の發展、そして大東亞の繁榮を常に希望するのは、日滿の先人の靈であらう。

陸海軍病院慰問淨土 寄附者芳名 (敬稱略)

一圓六十錢	福岡縣朝倉郡宮野村	淨福寺
一圓二十錢	神戸市神戸區北野町 四ノ一七〇	多村照恵
十圓	京都市	西尾得賢
二圓	福島縣三池郡高田村三浦	湯村大作
一圓二十錢	静岡市新道四ノ十七	鈴木電太郎
三圓	山東省德縣自強街	西野智彦
一圓	名古屋市昭和區御盆所町	川口拜佛
二圓四十錢	蒙疆張家口居留民團内	白馬教宣
二圓四十錢	大阪府泉南郡尾崎町	池田フサ
六圓	石川縣鹿島郡南 大谷村花園	池岡直義



白 牡 丹

吉 田 絃 二 郎

このころ一人の青年がわたくしを訪ねて來た。その青年は雪の朝、人の足駄の土に汚された雪の痕を見出しては「神に依つて作られた神聖な自然を人間は土足に依つて汚す」と思った。そして眞白な雪を手で掬うては下駄に汚された痕を埋めて行つたことを語つてゐた。無論少年時代の思ひ出話である。

この青年の行爲は大人から見れば奇矯であるかも知れぬ。すくなくとも常識的ではない。けれどもこの話はわたくしたちの胸に迫るものを持つてゐる。

またその青年はかつて日露戦争後日本觀光に來たロシア人と日本少年について語つた。ロシアの觀光客は日本を訪れてさまざまの不快な印象を刻みつけられた。然るにたまたま道を問うた一中學生の温か

な態度によつて、ロシア人の日本觀はまつたく一變してしまつた。少年は日本國內の觀光の場所、鐵道の選び方までも一々親切に教へてやつた。ロシアの觀光客は思つた「何といふ親切な日本民族であらう。こんな親切な民族に打ち敗かされたことはロシア人にとつて不名誉ではなかつた。」この觀光外人は日本をたゞへつゝ故郷に歸つて行つた。

さらにその青年は一獨逸少年について語つた。日本の或る有名な經濟界の某氏が獨逸を訪れたをりのことである。

日本の某氏は獨逸の少年にサインを乞ふた。たまに少年は萬年筆を持たなかつたので、某氏は自分



の萬年筆を少年に貸した。少年はサインを了つて萬年筆を返さうとした途端に日本紳士の一行を載せた自動車は走り出してしまつた。少年はいつかは再び日本の紳士がその町に還つて来るであらう日を待つてゐた。しかし日本の紳士は終に還つて来なかつた。

三年経つた或る日、日本の紳士は日本に送られて來た一本の萬年筆と獨逸少年の父からの手紙を受け取つた。萬年筆は破損してゐた。少年の父の手紙には次のやうな意味が書き込まれてあつた。

「わたくしの子供はあなたの萬年筆をお返しするこゝとができないのを苦にして、いろいろ手段を盡して見ましたが、なかなかあなたのお住まひが知れませんでした。その間に子供は不幸にもトラックに敷かれて亡くなりました。その時も肌身はなさずあなたの萬年筆を持つてゐましたので、申しわけもありませんが、萬年筆を破損させました。かれは死ぬ時、何としてもこの萬年筆をあなたにお返ししてくれ。さうでないとい獨逸の全少年の名譽に關するからと申しました……」

わたくしを訪ねて來た青年は眼をかゞやかしつゝ語りつゞけた。

わたくしは下駄の土に汚された雪を淨めて歩いた青年、觀光外人に親切であつた中學生、獨逸の少年をたゞ一つの存在にして考へてゐた。

青年のこゝろはいつも正しく、いつも美しい。青年のこゝろを失ふ時人は俗人となり、國家は滅びる。

八十歳九十歳にしてなほ青年のこゝろを失はない人は賢人に近いであらう。二十歳三十歳にしてすでに青年のこゝろを失つたものがある。

神佛を見るものは青年のこゝろである。眞理をあるゝもの、眞理に生きるものは青年のこゝろである。

青年のこゝろは往々にして夢である。詩である。

しかし夢を蔑んではならぬ。詩を冷笑してはならぬ。地に足を着けつゝなほ天上の世界を直観するものは宗教的な夢、哲學的な詩でなくて何であらう。

青年のこゝろに湧く夢は現實以上の現實である。ただ一本の破損したる萬年筆は少年の美しい夢につゝ



まれた時幾百萬の獨逸少年たちを美化し、幾千の日本人の上に働きかける現實の力を持つてゐる。

一日本の中學生のやさしいこゝろは幾萬のスラブ民族の心を柔らげ、幾百萬の日本青年の姿を美化する。それは幾百萬圓の巨額を要する國家的な宣傳にもまさる現實の力を持つてゐる。

×

わたくしを訪ねて來た青年は、このころ市井に隠がれてゐる燐寸の軸の悪いことについても語つてゐた。子供を家に置いて工場に働きに來た若い女工が、不圖子供のことを思ふ利那、機械に狂ひが出るのです。その結果燐寸の軸が不等なものとなり、或は軸頭の藥品が巧く附かぬことになるのです。」

わたくしどもは悪い燐寸にあたる毎に腹を立てるかばかりに、一度はこの青年の物語を思ひ出すべきである。家に子供を置いて來た若い母親の面影を想ひやるべきである。

×

今日も朝から雨だ。冷たい春の雨である。書齋に入つて雨の音を聴く。誰れもわたくしを呼ぶ者もゐない。

八疊の茶の間に坐つて見る。軒に迫る若葉のため部屋は暗いほどである。そこにも誰もゐない。奥の座敷に坐つて見る。二三日前庭の隅から切つて來て生けて置いた山吹がこの部屋に孤獨をひとりで占めてゐる。

離房の佛間に坐つて見る。裏の畑から切つて來て供へて置いた白い牡丹が薄暗い佛間の靜寂をこめてゐる。香を焚く。今朝は快く一筋の絹絲のやうに眞直ぐに香煙が立ちのぼる。

窓をへだてゝあたりの木立から筒鳥のやうな鳥の聲が聞えて來る。二三日前から自分の耳を疑つては聴いてゐたが、たしかに鳥の聲である。

鳥の聲が止むとふたゝび雨の音がして來た。雨の音に交つて、笹の葉の落ちる音が聞える。今は竹の秋であらう。笹の葉はさかんに落ちる。

日はやがて暮れるであらう。今日もまた終日たゞひとり庭に面して坐り、庭に面して思惟する。

歌

壇

興謝野
鼠子選

満洲 鶴岡 慈龍
永き冬 溶くるを知らぬ 雪原に 春風
立ちて 今 鶯鳴く

北海道 深谷 哲哉
雪解けて 青葉 驚れる 土手の 背に 辛
集ひて 千等の 笛吹く

評一二等共に、北の國の永い冬に耐えて来た人の春に送った深い喜びが言外に響つてゐる。前者は北滿警備の駐屯兵の歌として味はふ時に、その感慨は一層深いものがあらう。後者は廣漠とした牧場を持つ北海の雄く五月のよさを思はしめる。

名古屋 長谷部 静子
九十の 齡越しつる 我が 母も 國に 捧
ぐと 綱を なひ ます

評戦争以来、母土歌壇投稿者各位の歌も海國的に立派なものが多くなつた。そして大日本國民としての自覺が深い感動と熱情を以つて示された。本月などは特によい作が多くて順位をつけるのに困る程である。

大分縣 田邊 信子
南天の わか葉に 吾子の 手に 似たり
かそけく 揺るや 風も 吹かぬに

愛知縣 鈴木 良和
大御代に われ生を 享け みたい くに

召され 傷き 歸りこしかな

東京 細田 初枝
シンガポール 陥つと ともすみあ
かりを 神に ささげて 涙あふれぬ

北海道 寺田 頼山
物なべて 有り餘りたる 時よりも 足
らで 堪へうる 世こそ 安けれ

廣島縣 上原 四人
國あけて 戦ふ 日々 温かき 飯食ふ
さへや ありがたきかな

京都市 頼島 孝治郎
往きし 子を 朝な夕なに 伏し拜む 今
宵いづこに 彈と 臥すらん

岩手縣 中村 てつ
不落ちて 城の 落ちたる 喜びよ つく
づく 思ふ 民ぞ われ等

愛知縣 稻本 利一
父遊きて 三年となりぬ 今日の日
國の 勝鬨告ぐる さやけさ

新潟縣 北條 竹香
聖戰に わが子も 居ると 思は へば 花
見る 心などか 起らむ

京都市 竹内 修吾
大君の子なり われらが 私に すべ
き子ならずよ 導かん

北海道 瀬口 清
大君のために 大和の さくら 花笑み
つつ 散らん 秋はいまこそ

三才の 長女を 乞くして
逝きし 子が 陣子につけし 汚黴なれ
ば 惜しと思ひつ 残しけるかな

北海道 花田 順往
弟子 願道中 國に 寄する 歌
み佛に 誓ひまつりし 真心を そのま
まつく せ 皇國のため

名古屋 江崎 孝雄
征でて 行く 人の 兒らしも 幼な 兒の
影を 慕ひて 泣きて 追ひゆく

靜岡縣 一向 山人
さくら 花供へ まつりて 佛誕の 今日
の よき日 を 偲びけるかも

石川縣 西 太
意外なる わが 落下傘 降下すと ニ
ユースに 開きて 心たかぶる

奈良縣 水谷 良子
八重櫻めで にし 母を 慕ひつつ 冷た
き 石碑に 花供へけり

東京府 小柳 萬
大空に 爆音 高しむさし 野の 春深く
して 力溢るる

北海道 中村 茂壽
雨けふる 丘越え 来れば 芽柳の そよ
ぐ 小川に 鳴く 蛙かも

大分縣 淺輪 机舟
華府に 植ゑし 日本 の 櫻伐りして ふ
洋鬼の 心うと まるるかな

栃木縣 白石 とみ子
泣けばとて 御名呼べばとて 亡き 姉
の 我れに 歸らん日は 永久になし

北海道 前野 賢一
かがやきて 朝日昇れる 爽かさ此の
心もて 今日も すぐさむ

岸和田 田中 廣眞
来るべしと 待ちにし 敵機 遂に 来ぬ
前線 銃後 これにより 固し

山梨縣 坂本 敦雄
天照らす 大御代のため 我召され 軍
に 散らば 思ひなからむ

和歌山 北垣 片人
病む 床に 清々しけり 傳はるは 大み
いくさの 勝ちに 勝ちたる

東京府 富 幸子
春風よ いたく な吹きを 病みこもり
あはれ 花見ぬ 父上のため

朝鮮 三浦 砂子
うらうらと 春暮るる なり 陸しく 月
を よぎりて 雁わたり 行く

投稿規定

はかきに 一回二首以内と
あて住所氏名明記の上送
ることを



福田行誠上人をしのぶ

行誠上人と容齋

結城素明

菊池容齋にして若しも行誠上人と相遇ふこと
となかつたならば、その不朽の名著たる
「前賢故實」も或ひはその刊行を見るに至ら
なかつたかも知れぬ。また行誠上人にしても

しも菊池容齋と相識ることがなかつたならば
その護持供養の聖像五百羅漢の書幅も或ひは
この書人によつて製作されず、またその遺書
中特にこれを記す程の名作を世に傳へるに至
らなかつたかも知れぬ。

上人は世に羅漢行誠の名を以て呼ばれた人

であるが、その遺書四通中に「五百羅漢聖幅
護持方軌」と題する一通がある。それによる
と先づ第一に一年の二度の彼岸會には必ず五
百羅漢の書幅をかけて舊規の通りに供養せよ
とある。そして最後の條には、

「世間無常なり、萬一世上飢饉其餘天下の大
災等有之候、節人靜室に顛れ、乞人土地に充
満する様の時節あるに於ては、僧徒は大悲心
を基とし、衣資寺産を盡して窮迫を救療する
は固よりの志なり、右様に及ばず無遠慮此
聖像を賣却して米錢に易え存者得樂の方便と
すべし(價值の高下を論せず救窮に急なるべ

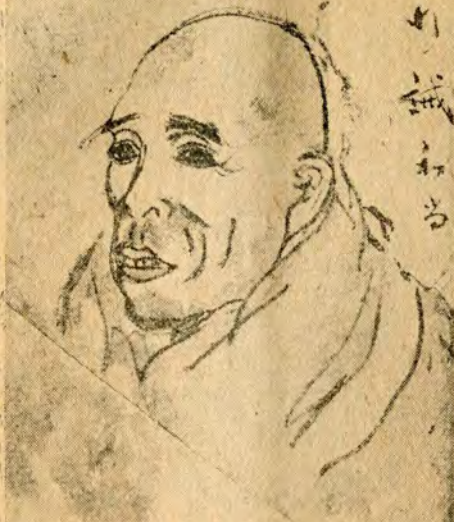
し猶此事を施家へ斷るべし) 微塵斗りの戀着
心を懐くこと勿れ、但し造像起塔等の容預の
喜捨には之を禁ず、是鐵眼禪師經版の財を以
て救飢を行ふ再回に及ぶに倣ふなり。」
とある。

上人と容齋との交遊を結ぶことになつた因
縁については「中央新聞」所載の「近世名匠
談菊池容齋」に次のやうに記してある。
「一日行誠上人語りけるは納久しく畫をよく
する友を得まく欲すれども、當世の畫師と稱
する輩は多く俗漢のみに近づくべからず、あ
われ二君(註・小島知足、飯野厚比のこと)

の交友の中に心も清く行も高き畫家あらばひき合せてよとあるに、厚比の曰く、上人のたまふ如く多くは語るに足らず、此にひとり、菊池武保容齋と名のる者あり、南朝忠臣の後なるが和歌を余に問へり、その人品いと高くして、當世多く得やすからず、上人彼に交はりたまへ、彼も上人の如き高德に近づきたらむには、彼のために此上なき幸なりとて、即ち容齋を小石川の傳通院に擡きて上人に紹介しぬ。是れ容齋と行誠上人と相識りたる始めなりき。

飯野厚比は歌道の上から上人及び容齋と早くから各別々に交遊してゐたものと思はれる。同様に小島知足とは書道の上から互に交を結んでゐたものであらう。この厚比、知足の二人によつて上人と容齋との關係が生じたと傳へられることも當然な成行と解される。

容齋は本姓河原と云ひ西丸御徒の役を二十



(像人上誠行筆齋容)

四年勤続して文政八年三十八歳で隱居し父祖の家系菊池氏を嗣ぎ、それから畫人としての新生面を開いた。「前賢故實」は最初の二巻を天保十四年に發刊され、逐次刊行して明治元年にその全部を了つたものと思はれる。この

編をなすために容齋は京畿の間に漫遊して神祠佛刹の藏品について、その考證するに足るものは悉く搜索してから筆を起したものである。藤岡作太郎博士の「近世繪畫史」によれば

「そもく『前賢故實』は容齋が刻苦精勵の餘に成れるものにして、或ひは祕庫の圖書を閲覧し、或ひは近畿の遺物を探検して、古來の明君、賢輔、忠臣、烈士五百餘人の像を畫き、附するに小傳を以てす。前後十七年の星霜を経、四十八歳に至りて成れり、刻成りてこれを 孝明天皇に獻する。天皇觀感淺からず、のち和氣清麿に神號を追贈せられしも、蓋しこの書與つて力あらんといふ。」

とある。そして 皇室に獻上したものは三卷六冊本のものか、或ひは天保十四年開版の二卷四冊本であつたと考へられる。更に「前賢故實」が成るや、たまたま聖駕東巡の日に遭ひ、明治天皇の御覽に供へ奉つた。聖旨殊に稱褒を加へさせ給ひ、之を内庫に留めさせ給ふたといふ。嗚呼、聖恩の宏大なる、老辭の容齋をして如何ばかり感激せしめたであらうか。また相抱いてこの喜びを共にしたのであらう人は、この書の上梓に最も因縁の深い行誠上人であつたと思ふ。

文部省の「高等小學讀本」(女子用)卷三に

は「五百羅漢の書翰」と題し、前賢故實の出版願末に就てかういふ語を載せてゐる。

「前略」抑々今日廣く世に行はるる「前賢故實」は容齋が畢生の心血をしぼりてゑがきな

し以て風教を補はんとしたるもの、辱くも明治天皇が日本畫士の號を賜ひしもこれがた

めなるべし、また和氣の清麿に神號を追贈あらせられしも、或ひは此の書が其の動機とな

りしなるべしとも傳ふ。されど初は此の十年苦心の作も、發行の書肆なく上木の資財なく、

久しく竈底に蓄めて、徒に紙魚のすみかとなるを待つばかりなりしかば、此の事餘りに

情なく折節は年來の親友なりし福田行誠に向ひて、堪へ難き遺憾の情を漏らしたりき。

其の頃、江戸牛込に加藤金兵衛といふ商人あり、手の中の珠と慈みし一人の娘年頃に

なりしかば、或方に嫁入らせしに幾程もなくて身まかりぬ。婚禮の折持參の衣服調度、今

は此方に置きてもせんし、唯敷きの種ぞとて嫁の方より里方に返す、里方にては受取らず「一旦遣はせし娘の道具は即ち其方の物、

それを返さるゝは死したる者を離縁せらるるやうにて、草葉の蔭にも如何ばかり悲しからん、これは其方へ」「いや、其方へ」と押問

答の果、金兵衛は腕こまねきて「さらば我に思案あり、今深川におはす行誠上人は、淨土

宗の大徳、古今の名僧と聞くに、此の聖に託しまるらせば、衆生濟度の便ともし給ひ、古

き娘が往生の縁ともなりぬべし」といふに、即ち相談は決し、彼の調度を賣りて一千兩の

金を行誠に捧ぐ、さてこそ行誠は容齋を招きて「喜ばれよ、御身の志は成りぬ、印刷の

料は調ひたり」とあるに容齋は涙ぐむまで有難く、版稿の後凡そ二十年にして、ここに「前

賢故實」の出版に取りかかりしなりけり、斯くて年來の宿望は漸く遂げられたりければ

「如何にしてか此の大恩に報ゆべき」と尋ぬるに行誠は「善いかな、さらば五百羅漢の畫

をゑがきて供養し給へ、亡者の爲、施主の爲、如何ばかりなる功德ならん」といふ。「それこそ我にはふさはしき業なれ、如何にもして加

藤氏の名を萬世に傳ふるに足るもの」と、

沐浴齋戒してかき上げたが、此の本誓寺の什物なりとかや（藤岡作太郎、國文學講話による）

尤もこの話には他に異説もあつてよく判らぬ點もある。つまり加藤智藏なる人が直接容

齋を訪ねて、行誠上人のもとに贈る五百羅漢圖の執筆を依頼し、容齋はまた智藏母子の至

誠孝貞の情に感じて、起筆後凡そ半歳餘を費し、文久元年初秋孟蘭盆會中に仕上げたとす

るのがよいやうである。それは丁度「前賢故實」の出版に先だつ七年前のことである。こ

の時の揮毫の謝禮金によつて「前賢故實」の出版が出来たるやうになつたとも思はれる。

今日菊池家には容齋遺愛の小屏風一雙が傳はり、容齋知友の四十二人の肖像と、傍らに

各々その人の書簡又は詩歌の類を貼付けてある。その肖像畫は殆ど畫稿の類であるが、上人

の肖像は短時間で寫したと思はれる素描に、肩に「行誠和尚」と書入れて貼付けてあ

る。その描線には金まない妙味があり、精采突々たる上人の風貌を傳へてゐる。



行誠上人を思ふ

芝蓮山人

よつて難かしく判らないことがよくあつた。

上人のことを考へるには上人の御心になつて考へてみぬと片手落なことになつて、ほんとの眞意がつかめないことがある。

かつて慶應義塾の教師でロイド博士と云ふ

人がゐたが、この人はいつも増上寺の三門の前を通る度にちやんと帽子をとつておじきをして通つてゐた。或る時のことロイド博士が

鳩を澤山に行誠上人のところに持つて來たことがあつた。上人に放生會をやつてもらふつ

もりなのである。ところがこの鳩をみて上人がロイド博士に云つた言葉がふるつてゐた。

「外國人は牛馬さへ喰ふといふぢやないか、

鳩だつて喰つてしまへばいゝに。俺のやうな

貧乏人のところに持つてきたつて、第一豆を

買つてやらなくてはならない。」

もつともかう云つたからとて別に鳩を追ひ返したわけではなく博士の希望通り放生會を修したわけだが、この放生會がまた普通のとは變つてゐた。鳩を一羽々々御自分で大空に放

つてやりながらその度にただ一言「南無觀世音菩薩」とお唱えになつただけであつた。

むかし日本新聞といふのがあつて、堀南氏

が主筆で當時の有力な新聞であつた。この新聞に一週間に互つて當時有名な高僧であつた

洪泉禪師が殺生戒について説かれたことがあつた。そして矢張り同じ時分に或る金持の作

で狩獵にばかりこつてゐて、親が殺生を止めてくれといくら意見をしても少しもきき入れ

ないといふ不孝息子がゐた。その両親も大變

行誠上人がたうとうおなくなりになつたと聞いた時には世の中が暗くなつた思ひがした。ほんとに行誠上人は五百年不出世の高僧であるといふても過言であるまい。私は他人にもさう云つてゐるし、今でもさう信じてゐる。或る人が日本佛教界に一人半の僧がゐるといつてゐた。その内の一人が行誠上人で、その他總ゆる僧たちを全部括めてやつと半人になるといふのであつた。私らが未だ小僧でお側についてゐた時も、上人の云ふことが時に

困つて、丁度折から日本新聞に連載された洪泉禪師の論説を件に示して殺生の悪いことをこんこんと教へたが一向にその件が狩獵を止めようとしなかつた。そこでその人も大いに弱り、洪泉禪師のやうな高僧の云ふことを聞かない位ではとても仕方がない、一つ増上寺の行誡上人にお願ひして意見をしてもらはふといふことになつて、一日行誡上人を招待したことがあつた。

上人は招待を受けてその家に行つたのであるが、一日中世間話ばかりしてゐて一向に殺生戒の話を始めてくれない。その内に日も暮れてきたし、おやちは氣が氣でなし、遂に上人に「一つ件に殺生戒のことを……」とお願ひしたのであつた。すると上人は初めて氣がついたやうに件の方に向つて、

「ああ、さうか、お前は殺生をするさうだが殺生をすれば何んになる……」

「……實は面白いのですから、つい……」

「殺生するのはよいが、ただ面白いだけがよろしくないぞ……」

と申された。その件はこの一言だけであれだけ好きであつた狩獵をびつたり止めてしまつた。つまり上人は狩獵も職業でやるなら宜しいがただ面白いとか趣味の上で殺生するといふのが悪いと云はれたのであつた。一週間に亘る高説すら耳に入らなかつたこの件が上人の一言に感心して止めてしまつた。この話は勝海舟先生から聞いた話であるが、その時勝さんは「上人に於て俗を見ず」と云はれてをつたが、なる程と思つた。

殺生戒についてはこんな話もあつた。五重相傳のために小田原の大蓮寺に行かれたことがある。その時に圓りの者が上人がさぞお疲れであらう何かのおなぐさみにと、すぐ裏が海岸になつてゐるので折から網を引いてゐたのをお見せすることになつた。その時上人は網に魚が入つてとれる度に「南無阿彌陀佛」とお唱へになつてゐた。ところがその時は大變に漁があつて澤山の魚がとれた。やがて寺に歸られた上人は筆をとられて「大漁満足」と揮毫されたものである。全く上人はその時

に應じ相手によつての設法をなされたのである。

上人が箱根の石内といふ旅館にゆかれた時に「南無妙法蓮華經」と七字の額目を揮毫せられたことがある。その時も旅館の亭主が上人に一つ御揮毫をと頼みこんだのだが、上人は亭主の宗旨は何かと質ねられ、亭主が「日蓮宗です」と答へたので、それではと七字の額目を記されたのである。これ等も上人がほんとに宗義のない方であることを示してゐるわけである。

或る時兩國橋を渡つたことがあるが、橋のたもとにゐた乞食に向つていきなり「よく乞食をしてくれるな」と云はれた。私はお側についてゐて言葉の意味が判らず、お質ねしたところから申された。

「乞食をしてをれば盗棒まではすまい 立派な服装をしてゐても盗棒する人がある。わたしはお前たちにかつがれて赤い衣を着せられてゐるが、俺も亦乞食となるのだ。俺にはさつきの人が願首さまに見えたぞ。お前たちには

乞食にしか見えなかつたか。俺は觀音さまに戒しめられたのだ。

全く世の中には假刑事などと云つて警官の眞似までして悪い事をする輩すらあるのだからたまらないわけである。

上人はある時、「みなは一度に成佛するが、わしはなしくづしに成佛する」といはれたが、これは耳が遠くてよく聞えなかつたので耳だけが一步お先きに成佛してゐるといふ意味であつた。耳が遠いので讀經の時に自分だけが開經偈をおだしになつたこともあつた。

上人の精神はすべて一切經から出てゐた。また慈雲尊者をたつとんでゐたので慈雲尊者の思想がよく出てゐたやうに思ふ。

私の所にも随分澤山に上人の遺墨もあつたのだが、みな他人にやつてしまつて

今はなくなつてしまつた。一つお見せしようか。この軸は上人が講義をしてゐる所を御自

分て描かれたまあ自畫像みたいなものだ。この軸はある友人に貸して二十年にもなつたものを、これを表装してくれた淺野定次郎氏に

なぞあつたかゝるおぼろげな

おぼろげな

おぼろげな

おぼろげな

おぼろげな

おぼろげな

おぼろげな

かけてをられるな。この簀が實におもしろい。讀んでみようか。

「苦空無常無我是菩提の道ぞ、なむあみだ佛は往生の行ぞ、ききたくないものは聞くな、歸りたいものはすぐにかへれ、しかし居ねむりしてもここに座を運ぬるものは後生のみやげだぞ」

こちらの軸は、圓が大きく描いてあつて、「かどたてるな」と認められてある。これは或る所に招待されて、上人が「何うしてゐるね」と質ねられたのにその家の人が「何うも爺は喧嘩ばかりして仕方がありません」と答えた。そこで上人は「かどだーすな」と云はれた。そして歸つてこられてからこれを描かれたのである。

上人は實に簡單明瞭なお方であつた。鬼の目も涙は圓し秋の月

といふ句もある。うしろ向きに描かれた達磨に「ちとこちら向け」と記されたこともある。

今宵とて心うつさぬ人ぞなき
まことに月は鏡なりけり

おくしものかしら白くなりけり

松も昔のともがきにして

こきもあり薄きもあれどおほかたの

秋にはもれぬ峯のもみぢば

上人は別に書きとめておくことをしない方であつた。そしていくらでも次から次にポロポロ口をついて出るといふ風であつた。

ある時上人が神奈川縣の高島右衛門といふ人の所に招待されたことがあつた。その折に主人高島右衛門は上人を待遇のために、ある歌讀みの女性を聘んで上人に給仕をさせた。すると上人はその時連れてゐた侍僧たちに向つて、

「このかたは、女性の身にして尚且つかくの如くであられる。お前たちも大いに精進努力しなければ恥かしいことである」

とその女性を賞讃し、併せて一同を戒めたので一同はほんとに肅然としてしまつた。ところがその女性は「繪も描きます」とばかしく今度は畫を描いて上人にみせたものであつた。すると上人は今度はその女性に向つて

歌をよむ女房などは持たぬもの

亭主をしりにしきしまの道

と狂歌一首をよまれて戒められた。此等も上人が一方を戒め又他方にも反省をうながすといふ、いはば滞りのないやり方であつた

和宮さまの普請奉行をしてゐた人が、或る時上人の短冊を持つて歸つた。その短冊にはいたづらに枕をてらすともし火も

思へば人のあぶらなりけり

といふ歌が認められてあつた。その人がこの歌を宮内省御歌所の所長高崎正風氏のところに持つてゆき見せた。すると正風氏は大驚いて「これは何んといふ人傑が歌んだのか」と賀ねたので、その人は「縁山（増上寺のこと）の活佛の歌である」と答へた。その時正風氏は縁山を泉山泉涌寺のことと聞き違へて

「泉山の活佛の歌である」と思ひ込んでしまつた。その後になつて正風氏が京都に行つた際、尾崎完夫といふ人に向つて「かういふ歌を詠む人がここにゐる筈であるが知らないか」と「灯の歌」を示した。尾崎氏はいくら

考へても判らず、一山を探して廻つても判らない。そこで一山の内の歌人といはれる人の歌を持つて来て「この人のことですか」と

賀ねた。すると正風氏は「こんな歌とはまるで違ふ、京都にゐながらこんな傑物を知らなくでは仕方がないではないか」と尾崎氏を叱つたのであつた。

丁度その時、西本願寺の赤松運城が訪ねて來たので、尾崎氏は早速このことを赤松氏に賀ねると、赤松氏は「それは縁山の行誡上人のことである」と教へてくれた。尾崎氏は「なる程行誡上人のことであつたのか」と初めて判り、すぐ正風氏のところに行つて「あの歌は増上寺の行誡上人の歌である。あんたは東京にゐてその位のことを判らないのですか」と通牒したといふ話がある。

この歌は正風氏を通じて畏くも天竺に供奉つたものである。その折に天皇には思へば人のあぶらなりけりの人といふ字が若し民であつたら、朕の歌になるものを」と仰せられた由も承つてゐるのである。

俳

壇

太田
耳動子選

東京府 萩原 通孝
噴煙のなびける村の春祭

評 山の噴煙と共に生くる村。此の山に關聯してある春祭ならんか。内容に深いものがある。

秋田市 羽後 國實 隨
魂も來上庭の櫻の照りまさる

評 お祭ばかり騒動へするものであるやうな概念を此の句は打趣して與れてゐるところがよい。

満洲 鶴岡 慈 龍

西尾 平作
俯向いて行く外はなき吹雪かな
評 作者の心持がはつきり出てゐるのがよい。

窓鳴らして春の眞風おとつる
北海道 花田 順 往

佛光によみがへりけり春の曉
同 前野 賢 一

老鶯の聲美しくころがれる
横濱 田中 玉 泉

下駄落す池の深さや水溫む
大分 田邊 春 草

ひねりたる柿の若葉や馬の宿

小樽 中村 もん
風温む一顰林檎の花しろし

評 青森 高松 昭 雄
櫻咲く缺越す館の音もなく

小樽 平井 正 念
舞陀とともに見てゐて花の美しき

北海道 深谷 壽 野
郭公の渡る谷畑豆を播く

長崎 池田 春 枝
櫻見る花岡山に八十の春

和歌山 北垣 千 里
うたゝねの人の姿や山霞む

富山 佐伯 光 安
木蓮の白きに庭の暮れかねて

朝鮮 三浦 砂 千 子
春風の風情の中にぬれてみる

島根 林 良 碩
梅ぬくし老僧お茶を立てゝある

滋賀 重野 ふみ 子
彼岸會に白衣の勇士まゐりけり

大阪 堀田 俊 光
奥山の道にさびしや紅梅

大分 河野 善 隆
春がすみ細になびきて阿蘇の山

兵庫 水谷 良 子
慰問狀祖國の春を封じけり

徳島 米田 正
ひそやかに降出でけり春の雨

岩國 長岡 白 朝
瓢をなしてめぐる線路や春の山

京都 齊藤 賢 三
春や梅の林の細道を

東京 井原 し ま 子
うらゝかな日をかゝげけり觀傳會

京都 岡野 鈴 月
賀茂川や繪日傘映る稚兒櫻

富山 藤崎 亮 光
靖國の神と見上げる櫻かな

高岡市 内山 櫻 堂
花ビラに白き迴廊踏み通る

東京 船津 定 祐
雛僧の青きつむりや花祭

東京 小山 し づ 子
春節にさかづき事をとりかはす

京都 竹内 修 吾
僧堂はがらんどなり春うらゝ

土佐 横山 苑 國
青踏んでさらりと醒むるバスの酔

大分 沖村 貞 美
行僧のあたまたき春の宵

島根 仁 阿 彌

母の手に焼香する子櫻の雲

同 鶴岡 慈 龍
譯まつり吾子はひいなのか如くなり

京都 佐伯 靜 園
池うらゝ景色つくれる絲柳

島根 清 彌 山
土筆摘む母娘まことに樂しけれ

大分 秋 芳
四五坪の庭の春雨有難し

高松 石見 千 翠
笹鳴きの飛び立ち雨となりにけり

横濱 堀井 六 市 子
句の寺を訪ねて庭の花見かな

京都 永田 七 郎
櫻咲く校庭ありて入學す

秋田 後藤 光 子
星飛んでより風荒れし桃の花

大分 遠藤 桃 舟
賤の背戸一輪ばかり黄水仙

京都 福島 孝 治 郎
入學の徽章の光る花見かな

秋田 鈴木 白 舟
馬の蹄遠くへだたる櫻かな

今治 三木 光 子
花種を隣同志が分け合ふて

投稿規定

官製はがき一四二句以内
とし住所氏名明記の上
てに送ること



法 爾 法 然

藤 原 了 然

法爾の道理と云事あり。ほのはは空にのほり、水はくだりさまにながる。菓子の

中に、すき物あり、あまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。

阿彌陀佛の本願は、名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給ひたれば、ただ一向に念佛だにも申せば、佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし（勸修御傳卷二十二）

(一)

人間は理性的動物であるといはれる。たしかに、人間は生れつき、こよなく理論を愛し限りなく眞理に憧れる性質をもつてゐる。

人類あつて以來今日まで、いくばくの人々が、眞理探究の旅をつづけたことであらうか。けれども、眞理の正體は否として捉へがた

いこと恰も地平線の眞相にも似てゐる。地平線は、追つかけるほど遠ざかる様に、眞理はこれを把まふとするものには常に遠い彼方にある。

眞理を外に求めるといふことは、死體の解剖によつて生命のありかをつきとめやうとするのと同じであり、且〇から水の味を翹り出さうとするのとなんらえらぶところがない。地平線を追究するものは、自分の現在立つてゐる地點そのものが、地平線であることに氣づかねばならないやうに、又、水の味はこれを飲むものにして初めて端的に感得されうるやうに、眞理は、内に掘り下げらるべきものであり、百の理論よりは一の實踐の中に最も的確に窺はるべきものである。

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人のころにぞすむ（法然上人）

月の光は、皎々として地上の萬物を照らすであらう。差別遠近し

て照らすのではない。水といふ水には、たとへそれが、葉上の一滴の露であつても、月はその全貌を宿す。同じやうに眞理は、到るところに存在する、われわれの脚下にみちみちてゐる。しかし、水なければ、月影を宿すことが出来ないやうに、心水なければ眞理は、その影を宿しえないであらう。又、大水には大きな月影が寫り、小水には小さな月影しか映らないやうに、眞理は、われわれの心水の大小に随つて千差萬別の影を宿す。

(二)

眞理の影を外に求めることの愚に氣づき、心水こそ眞理本來のありかであることを覺り、心水の清澄に心するを宗教といふ。

宗教は人生の眞理（眞實な人生）の追及である。ほんとうの生き方の探究である。

眞理が、常に何處にでも儼存してゐるやうにほんとうの人生また何時いかなる境遇にも見出すことが出来る筈である。けれども、本來静かであるべき水の本性が常に風によつてかき亂されてゐるやうに、眞實の人生もまた常にとらはれのためにその實現をさまたげられてゐる。

このとらはれを取り除くのが宗教である。従つて、宗教は目覺めの生活、醉はない日暮しを打ちたてやうとするものである。佛教といふ言葉の語義が、「覺者の教」と解せられてゐるのは寔に意義深い

ものが認められる。

よくあることであるが、とらはれるといふことを大切にすることとは嚴重に區別さるべきである。金にとらはれるといふことは、一見、金を大切にすることのやうに思はれるが、事實は凡そ反對である。金にとらはれるといふことは、その實は、金の生命を殺すことである。死蔵と活用とは大きな隔りが認めらるべきである。金を大切にすることとは、金の生命を尊重することであり、金を活用することではなければならない筈である。佛教で旺んに強調する布施といふことは、決してものを粗末にする立場からなされるのではない。惜みなく與へる」といふことは、ものの生命を最も大切にする心の持主にしてはじめて出来ることである。執着を離れるといふことは、分りやすいへば、このものを大切にすることといふことの外にない。

この、ものを大切にすることといふ立場を、外から見ると、二・二ンが五の世界といはれる。人生は二・二ンが五であると、よくいはれる。苦勞してゐるときに、五圓借りたから、成功の曉に五圓返へせば、損得なし、これで帳消しといふのは、ほんとうの人生ではない筈である。五圓借りたから五圓返へせばいいといふのは、五圓にとらはれてゐる、五圓の生命を殺した考へ方である。借りた五圓は單なる五圓ではない、五圓プラスである、従つて返すときの五圓もまた五圓プラスでなければならぬ、むしろプラス五圓が返さ

るべきである。

何れにしても、この、ものを大切に、するといふことは、その、ものの中に生命を見出すことに外ならないが、このものの生命となつてゐるものが宇宙の大生命として受けとられ、法爾法然の理と解せられる。

このやうに、生命といふものを中心にして森羅萬象を考へて行くところに本當の人生がある。一粒の米の中に天地の恵を感じるといふ宗教の世界が開けてくる。

(三)

宗教といふものが、ものの生命といふものを中心に考へる以上、この立場のすべての行動や判斷の基準となるものは、この、ものの生命を生かすか、殺すかといふことにある。ものの生命を生かす行動は、たとへそれが如何に些細と思はれることであつても精魂を盡して固守さるべきであるが、逆に、ものの生命を殺すやうなものは、たとへそれがどんな魅力をもつかすものであつても、斷じてこれに心を傾けない、これが宗教的な立前である。

古來の高僧たちが、地位を、金を、名利をあたら弊履の如く捨てて顧みなかつた事實は、この信念に基づく行動なのである。

高僧の生涯を一貫するものは、天地の理に生きることであり、その生活指針は、ものの生命を尊重することの外にない。ときには、

餘りにも淋しいかの如く思はれる名僧の事跡は、この信念から割り出されたものたるを知らねばならぬ。貌をすてゝ生命をとる、この立場を外にして高僧の芳躅は理解されないであらう。

ものの生命を大切にするといい立場からはこの心情が育まれる。

一は、この大切な幾多の生命を日々粗末にしこれを殺しつゝあるわれわれの現状を反省したときに痛感せられる深い慚愧の情である。これに報ゆることなき自分の乏しさに對する懺悔の心である。他は、このなすことのない自分に、限りなくそゝがれる天地の恵身を殺してこの貧弱な自分を支へてくれる數々の生命に對する深刻な感謝である。

この二つの心情の上に、本當の人生が打ち立てられる。報恩謝恩の行が起る。この報恩の行こそ、天地の理にちかひ、法爾法然の生命の開拓といふことが出来る。これこそ、生や死や、苦や樂を超越した行である。いひかへれば、永遠に生きる眞實の歩みである。

(四)

この眞生を完ふせんとする、ひたむきな精進が念佛である。

念佛とは、色々に解されうるであらう。けれども、結局は、佛を念ずること、佛を憶れることである。佛を憶れるといふことは、法爾法然の理(阿彌陀佛の本願)に降順しようとする魂の雄さけびといつてもいい。

とりわけ、法然上人の唱導された念佛は、選擇本願の念佛といはれる。選擇といふことは、文字の上では、一を取り他を捨てるといふ意味に解されがちである。すなはち、往生淨土のためには、諸善萬行は捨てらるべきもので念佛の一行のみが取らるべきであるといふやうに見うけられる。従つて、われわれ日常の生業も往生淨土のために、直接關係がないやうにさへ思はれることがある。

しかし、選擇の本當の意味は、このやうな排他的な偏狹なものであつてはならぬ。選擇を高調された法然上人の心底は、諸善萬行や生業を排斥するといふやうな、非現實的なものであつたり、人生を輕視するものであつたりする筈はない。念佛を選擇攝取された所以のものは、諸善萬行の否定ではなくして、諸善萬行を念佛の中に生かさうとする心情の現れに外ならぬ。念佛の中に諸善萬行を活かすといふことは、諸善萬行を本當に生かすことであり、バラバラの諸善萬行を天地の生命に培ふもの(念佛)として、各のその處を得せしめようとするものである。いひかへれば、諸善萬行は選擇本願念佛の中にあつめられることによつて、はじめてその意義を見出されることになるのである。

汲めども盡きることのないこの選擇の深旨に、はかり知れぬ崇高さと眞實さが味はれねばならぬ。

(五)

念佛は、易修易行だといはれる。いかにも、口稱の念佛は、簡にして易である。けれども、易修とか易行といふことは、單なる「しやすう」といふやうなことでは凡そ意味がないと思はれる。誰でも、何時でも、何處でも、稱へうるといふことは、勿論肝要なことに相違ないが、それよりも、易といはれる眞意は法爾の理にちかひやすうといふことでなければならぬであらう。天地の生命に觸れやすうといふ意味でなければならぬ管である。實際のところ、念佛は天地の生命(佛)に向つての、まつしぐらな接近の外なものでもない。こゝに念佛が、勝であるとか、易であるとかいはれうる價值が見出される。この眞生の開拓そのものを意味する念佛が、稍もすれば不急の些事と考へられたり、閑人の玩物のやうに思はれがちであることは、甚だなげかしいことである。國家多難、國事多端なる秋、なによりも肝要なることは机上の空論ではなくして、大地にしつかりと根を下した磐石の信念である管である。この信念を盛りたて育てあげて行くものは、「われ天地の理に隨順してあり」といふ自覺の外にはないであらう。念佛のいはんとするところは、まさにこの自覺そのものに外ならない。

念佛に明け、念佛に暮れる。死生ともに、あな、たまかせ。順境に心おこらず、逆境に精進たゆまず、鐵石の信に立つ不動の行、そこに念佛本來の面目が躍る、眞生の一路が輝く。念佛報國の眞意またこゝにある。



導 指 の 動 運 跳 繩

郎 次 林 口 出 課 鍊 體 省 生 厚

一本の繩をグルグル廻して跳んで遊ぶ繩跳は愉快なものである。男の子にも女の子にも喜ばれたまた大人にも子供にも適した運動でなる。このやうに繩跳が誰にでもすぐに出来る遊戲であつて、しかも實は仲々優れた長所を持つてゐるところから近頃では運動家がこれを行ふやうになり、いはば大人の繩跳として長足の進歩をとげた。それだけまた繩跳の方法にもいろいろなものが出来てきた。例へば個人で跳ぶもの、團體で跳ぶもの、繩跳の團體遊戲といふ具合に、たつた一本の繩の使ひ分けではあるが、そこに順序や規則を設けて實に數多い方法が出来てゐる。こゝうなるとまず／＼繩跳の體育の上からみた價值が意外に大きいことが判り、今では一般の運動家が好んでこれを採用するやうになつた。しかし運動家ならざる一般の人々にとつて

もまことに結構な運動なのである。この一本の繩を自由に使つて跳ぶところに全身に均一な運動を與へる。従つて近頃盛んに云はれてゐる均齊美のとれた健康體を創り出すには一番適したものと云へよう。この健康増進についての利點を簡単に申すなら、先づ第一に各關節が丈夫になり、胸が擴がり、少し位の畸形的骨格もこれによつて矯正される。内臓についても心臟が強くたつて、食欲不振や胃腸病で血色の悪いものには特に効果があつて、軽い心臟病にもよい。よく見受ける肥えて困つてゐる中年の男女や、女學校を卒業したばかりのお嬢さん方は大抵脂肪過多症なのであるが、こんな人々がやれば贅肉がとれて肥満防止になる。その他精神的方面の効果を挙げれば、限りがないものの、餘り効果ばかり述べたるとと藥屋の廣告みたいになるので省略するが、とに角近時特に高唱されてゐる國民體位の向上をはかるために甚だ適當なものであることだけは間違ひのないところである。

また繩跳は何所でも誰でもすぐに出来るといふことが實際にすぐ役立つ點であらう。準備といつても一繩本あれば足りるし、またどんな狭い場所でも出来る。老若男女を問はず



さ長の繩

夫れ夫れに適した跳び方があるし、忙しい人にも出来る。元來この繩跳は長い時間を跳ぶといふのでなく、ほんの數分間づゝ跳ぶのが立前であるから一寸した休み時間等を利用して手軽く出来る所に優れた利點がある。

これがため現在では、各小學校や中等學校に於ける體操科の教授要目の一つになつてゐるし、官廳や工場等にあつても新しい保健運動として次第に旺んになつてきた。また家庭にあつても大人も子供も一家揃つて楽しく遊べるといふ近代の家族遊戲として行はれるやうになり、段々と各家庭に流行をみるやうになつてきた。

前に述べたやうに今では繩跳の方法が數多く出来てゐるので、ごく平易なものから練習を要するものまでいろいろあつて、初めこそ易しいがまた熟練すればする程に上手にもなり面白い數々の仕方があるといふわけである。團體で行ふ場合にもいくら大勢でも一諸に出来る。短い繩と長い繩とを用ひて、九人組で一緒に跳ぶものがあるし、競争遊戲にしても四人が一組になつて各組の競争があり、いろいろな跳び方を組合せていくらでも多勢で出来る。かやうに難い方法も澤山にあるのだが、ここでは誰にでも出来る幾つかの繩跳の方法を説明して、すぐにでもこの運動をやつていたゞく一助ともしてもらひたいと思つてゐる。

繩跳の仕方

個人で普通に繩跳をする時に用ひる繩は御承知の通り短い繩である。これを長い繩と區別して短繩と呼ぶこととする。さてこの短繩

の長さは何の位がよいかといふのに、次のやうにしてきめる。即ち繩を兩手で持つたならば、その中央のところを兩脚でふんで、次に兩腕を身體につけたまゝ、肘をまげてみる。その時に繩を握つた拳が丁度肩の高さになる位のものがよい。また繩の太さであるが、直經一分五厘から三分位のもので、麻か木綿ならば一番よいが、何分物資統制の折柄であるから、何



領 要 の 勢 姿

繩跳をする時にはと角一度に長くやり勝であるが、跳ぶ時間をきめてよく守つてほしい。先づ三分間位跳んだら一、二分は休む。休

から、何んな繩でも適當な太さがあれば結構で、手もとにあるもので宜しい。

初めて

でからまた續けるといふやうに毎回を三分と
きめて頂きたい。この適度に休息をとること
は是非とも必要であつて、最初から餘り過度
にやると逆に身體の健康を害することゝなる
から注意しなくてはならない。過勞は何んな
場合でも避けねばならない。

さて次は繩跳の要領である。

繩を廻すのには手先で廻さず、腕で廻す。
つまり腕をなるべく大きく振廻すやうにして
繩を廻す。従つて腕を腕で廻すといふより
は、繩に惰力をつけて、この惰力を利用して
樂に廻すといふ氣持でやる必要があるであ
る。

どんな運動でも正しい姿勢をとることが大
切で、若し姿勢が悪いと折角の運動も餘り效
果があらならないやうに、繩跳も正しい姿勢を
とらなくてはいけない。繩を持つて直立した
時には、頭を正しく前に向け、眼はまっすぐ
前をみて、腰を伸ばす。

繩を廻して跳始めてからも十分に胸を張る
やうにし、腕を廻す時に肩を擧げないやうに

する。どうしても初めの内は繩にばかり注意
するやうになり、足許をみたがるもので、従
つて自然と肩がはり力が入り易いものであ
る。この二つの姿勢からなるべく早く樂なほ
んとの姿勢になるやうに努めなくてはならな
い。

足先で踏切る時には正しく強く、自然に跳
躍するやうにする。この際全身を正しく伸ば
し、腕は繩の廻るに従つて肘を十分にグット
伸す。つまり繩が廻るにつれて腕をまはし、
腕を廻すにつれて繩が廻るといふ氣持で廻す
のである。また跳んで足が地につく時には、
踵をあげて膝を少しまげ、ゴムまりのやうに
やはらかく惰性と緩衝とを用ひて、身體全體
が軽く愉快に跳ぶやうにやればよい。

個人繩跳の數種

繩の準備廻旋

繩跳をするに先だち繩の準備廻旋をする。
と云つても別に難しいことではなく、先づ繩

を右手に持つて（第一圖）身體の前で8字型
を描くやうに繩を二度廻すのである。（第二
圖）それが終つたならば、今度は繩を左手に
持ちかへて（第三圖）左手で前と同じやうに
8字型に二度廻す。

順廻旋兩脚跳

一番普通に行はれるやうに、繩をうしろか
ら前に廻して跳ぶ方法である。詳しく云へば
先づ繩がうしろから頭上をこえて廻つてき
て、足の下にきた時に兩脚を揃へて跳ぶ。（第
四圖）そして繩が足の下からうしろを通つて
頭の上にまわつてきて繩が頭上にある時にま
た兩脚を揃へて一躍とぶ。だから繩が二回
廻る毎に兩脚の方は二回跳ぶわけである。

この方法で跳ぶのには、先づ最初に繩を兩
手に持つてそれから、繩を前後に軽く振り、
段々と繩に勢ひがつくに從つて身體の前にき
たならば兩足尖を揃へて跳びこへ、それから
いま述べた方法によつて繰返し跳ぶことゝ
なる。そして跳んでゐる間に、身體の位置が



第一圖



第二圖



第三圖

變らぬやうに努めていただきたい。

この繩跳を「順廻旋」といふわけは、繩がうしろから頭の上に

うしろから頭の上に

ない内は他の方法に進んでも矢張りうまくはゆかぬものである。

順廻旋踏替跳

これは片方の脚だけで跳ぶ方法の一つである。そして右と左の脚を一回跳ぶ毎に換へて跳ぶのである。詳しく云ふと、先づ繩が前の方から廻つてきて足の所に來たときに、左脚で跳ぶ。すると繩が

うしろから頭の上に廻つてゆめ、丁度頭の上にきた時に同じ左脚で一跳躍をとぶ。ここまでは前述の兩脚とびの方法を片脚だけで跳ぶのと同じ要領である。このやうに一回左脚で跳んで繩が再び前か



第四圖



第五圖



第六圖

に來たなら、また右脚で一跳躍をする。(第五圖、第六圖)

つまり片方の脚だけで跳んで、繩が一回廻る毎に右と左の脚を換へて跳ぶのである。

この際に注意すべきは腰をまつすぐに伸ばしてよく胸を張ることである。片脚づゝ跳ぶので姿勢が崩れがちであるからよく氣をつけて正しい姿勢でとぶやうに努める。また身體を支へる脚もまつすぐにのぼして、跳ぶ時には足先きでとぶ。初めの内は身體がぐらつき易いものであるが、身體の兩側の均衡をたもつやうに心がけなくてはいけない。

馴れるに従つて調子よく軽く跳べるやうになる。

これと跳び方は同じ方法なのであるが、繩の廻し方が逆に廻す方法がある。つまり繩が前から頭の上を越へてうしろに廻り、うしろの方から足の下に繩が來たときに片脚でとぶのである。

この順と逆の二つの繩跳の方法が最も基本的なものであつて、先づこの方法を十分に練習しておく必要がある。この方法がよく出來

へて右脚でとぶ。そして繩がうしろから頭上

この跳び方を逆に繩を廻すから逆廻旋踏替跳といふ。

信 仰 相 談

(質問歡迎)

擔 當 中 村 辨 康

心をこめての供養が第一

(問)

淨土宗では佛様にお布施を供へる
のは何う云ふ譯ですか。眞宗では
御びき(お佛具)飯の功德が勝れて居ると云
ふが何う云ふ譯ですか。淨土宗の教へはお
佛具飯は本尊様に供へ、お布施はほとけ様
の功德になるのだと云ひますが本當ですか
また眞宗ではお佛具様一つで百味の飲食に
なるのだと云ふが、それは本當でせうか。

(青森縣・平館村・丸尾久二)

(答)

お布施と云ふのは菩提寺の御住職
なり又は僧侶の方に御願ひして亡
き靈に對し回向して頂いたとき、その御禮の
意味で差出す「金包み」のことに想像いたし
ますが、それならばお供へするものではありません。

まずまい。地方に依つては便宜上お佛壇の前
にそれを置いて、回向が終つた時それをその
まゝお禮として出すところもあります。また

お盆の棚經の時など、田舎では忙がしい爲に
双方の手間をはぶく意味で、施主の家では精
靈棚に「お布施」を供へ置き、棚經廻りの僧
侶の方では辭去する時それを押し頂いて歸る
と云ふやうなことをして居るところもありま
す。これは便宜上のことですから、お供へす
ることの功德を云々する譯合のものではあり
ません。次ぎに本尊様にお佛具の御飯をお供

疑多くして信を得ず

へするのは、自分の喰べるもののお初めに御
供養申し上げると云ふ人情の然らしめたもの
であつて、理窟ではありません。それを功德
があるとか勝れて居るとか云ふのは一種の勸
誘であります。ですからお佛具一つで「百味
の飲食」になると云つて奨めるのは必ずしも
眞宗にばかり限られたことではなく、佛教各
宗に通ずるすゝめであります。則ち幼稚な人
々へのすゝめとしてさう云つたのでありまし
て、實は功利的な意味に考ふべきものでな
く、何處までも純な感情から「御供養」する
氣持、又は「孝行」する氣持の現はれてなく
てはなりません。されば「本當か」と問ひた
だすべきものではなく、自分の誠心誠意をこ
めてなすべきことがらであります。そうあつ
てこそ初めて功德大なりと云はれるものとな
るのだと思ひます。

(問)

信仰を渴望して止まぬ一青年です。一般の人々は皆な念佛を稱へて居るが、考へて見ると遠い過去の歴史上にも割り出せない阿彌陀佛に「壽命せよ」と教へられるけれども、その道理が解らぬので、人真似のやうで念佛する氣になれませぬ。また佛書なども疑はしく自分の宗旨の爲にのみ説明してあるやうに思はれて、惱みが増すばかりで信仰心のわかぬのを寂しくおもふばかりです。如何にすればよいか御指導を乞ふ。

(富山・西礪波・高津・辻川星嚴)

(答)

信仰に解信(解かつて信ずる)證信(證據を握つて信ずる)仰信(唯だ仰いで信ずる)の三種があり、若い人は或る程度解信を要求して居るやうです。然しこの解信と云ふ信仰狀態はどアアヤのものはありません。理窟が解つて立派に信じたと自分も思ひ、人々もその信を傳へて居

程の人でも、身にふりかゝる大きな災害に出會ふと、その信仰がすぐベチヤンコになつてしまつて、今まで立派なことを言つて居たことが却つて面目ない恥かしくなるわけです。理解だけでは何遍も出たり入つたりして容易に確信に達しません。羅漢は預流一來、不退の三階段を経て達する心境だと言はれて居りますが、信仰にしましてもやはりさうで、始めは小乗的な自己の入信を中心として居りますから、羅漢のそれとは内容が異なるにしても、形の上では矢張り三階段を経るやうであります。即ち預流とは流れに預り得たこと、即ち信仰の潮流に乗つた形であり、一來は行つたり來たりすること、則ち或る時は信仰を得たやうにも思はれ、また或る時はさうでもないやうに思はれると云ふやうに、不定と決定との間を往來して居る姿です。解信では此の間が相當に長いやうに思はれます。尤も人に依つてスツと知らないうちに確信に達し得る人もあるにはあるでせう。

次に證信は解信よりも餘程確かですが、證據を得たと云つたところで、その宗教經驗なるものは實は人に依つてまち／＼なもので、すし、浅いものは得られ易いが深い體驗は容易に得られません。此の故にその體驗の内容をよく承つて見ないといけません。獨りよがり、に陥る恐れがあります。それは「いさゝかなこと」と古人も云はれたやうに實は大したものでもないのですから、そんなところに腰かけて仕舞つてはならないのであります。然し何と云つても解信よりも證信の方が固いです。何しろ自分の實際實證ですからね。だがそれだけに一面頑固なところがあつて信仰と云ふよりもむしろ執着とか固執とか云ふ心狀に近い狀態に墮り易で、餘り更じると變態になつてしまひますから何處までも先輩の指導をまたねばなりません。

この證信にせよ、また前の解信にせよ、説ずるところは仰信です。仰いで信ずることなき信仰はあり得ないと思ひます。従つて最後のおちつきは仰信となつてしまひます。しかも智者が懐みに懐みぬいて最後に仰信となつ

ておちついた信仰も、また愚かな者がよき人の教をそのまゝ鵜呑みに吞んで信じた信仰も、結果は畢竟同じものです。阿波介の信仰が法然上人の信仰と同じであると言はれたのもその「仰信」の點に於いて均しいからであります。

そこでお質ねの問題に移りますが「遠い過去の歴史」にも割り出せない阿彌陀佛なるが故に「歸命せよ」と言はれたとて、そんな沒理なものに歸命する氣にはなれないと云ふことがあなたの信仰への故障となつて居るやうですが、それではあなたは歴史的存在以外のもものは絕對にお信じにはならないのでせうか。即ち抽象的理念は絕對に信じ得ないのでせうか、また推定そのものも歴史的存在でないから信じ得ないのでせうか、よくよくあなたの實際を反省して見る必要があります。數學にせよ、物理學にせよ、第一假定を置いてそれから出發して居りますが、それは歴史的には割り出せないからと云つて自分は信奉せんと云つて居てすみませうか、それでは今日

の生活さへ否定しなければならぬと思ひます。イヤ阿彌陀佛は人格的存在だから歴史的に證明されない限り、それは假空的な人格であるから信じられない。とかう仰しやるかも知れませんが、人格と云ふものも本當は五尺の肉體を指すものではなくして、抽象的なものなのです。つまり智情意の三が平均して居るところに、その高低の差はあつても人格の圓滿さを見るのでありまして、この抽象的な人格はやがて一轉して擬人法ともなり、法律的人格ともなるのであります。此の故に人格必ずしも歴史的存在でなくとも是認が出来る筈です。況して阿彌陀佛は物質的肉體的存在に名付けられたものではありません。阿彌陀とは「無量」と云ふことであつて抽象概念ですが、それを「佛」として人格化する時、壽とか光とか云ふ人間の最も要望する内容を特に表出してより一層人格化するであります。草木でも器物でも凡べてを人格化する子供のときばなしは幼い子供に取つては決して偽瞞でも何でもあります。子供達はそれ

に依つて感化され教育されて人格涵養の實效を上げて居るのです。しかも壽命と云ひ光明と云ひそれは物質的存在に名付けたものではありません。

この壽命又は光明の人格化への是認は歴史的證明なくとも私達の理智の理解に依つて可能であります。法藏菩薩が宇宙的大生命を人格として認めたことが、よし歴史のものでもなくとも、理としては認められない筈はありません。時計が發明されなかつた前に時計の原理は實在でなく、發明の瞬間に時計の原理が實現したとは云ひ得ないやうに法藏菩薩以前から阿彌陀佛は法藏の姿として實在して居たのを、法藏菩薩に依つて法藏されたまでのものであります。然かもそれは私達の小生命の根元として宇宙の大生命でありますから、その人格表現たる阿彌陀佛に「歸命」し得ない筈はありません。あなたは歴史の證明の範圍に入れることの出来ないものを、無理に歴史



信 仰



相 談

も仕方ありません
よ。如何なる宗旨で
も立宗の時は「教相
判釋」と云つて一切

的證明を與ふべきものと假定して置いて、歴史的證明が出来ない／＼と叫んで居るわけでありますから、あなた御自身にこそ大きな矛盾を持つて居られるのであつて阿彌陀佛の矛盾ではないのです。自分の命の根元は歴史的に證明されずともいいのであり、且つ根元なればこそ「歸命」し「歸元」し得るのであります。

次に「佛書は自宗の爲の説明であるから信ずることが出来ない」とのことですが、説明なくしてどうして理解が出来るでせうか。對手を説得するのに「破邪、顯正」の二つの方法の内、顯正と云ふ正しきものを顯はす説明をこそ最も正しい方法とするのですが、あなたはその顯正は自分を説明するものであるから頭から信じられないとするのですから、極めて偏狹な思想の持ち主であると見做されて

經を自分の立場から批判して自宗の根據を明確にするのですが、あなたの説に従へばそれ等は皆な自己辯護であり自我主張であるから信するに足らないと云ふことになつて、萬卷の書物は悉く死灰に等しいわけです。書あれども書なきが如し。一體何を根據にして信仰を御求めになるおつもりですか。

信仰を得る方法として「就人立信」と「就行立信」とあります。今の書物に依るが如きは「解信」であり「就人立信」でありますし、念佛することに依つて信を立て行くのは「證信」であり「就行立信」であります。しかもそれらは最後に信仰に導かれるものであります。その何れをも否定してしかも惱んで居るとは矛盾も甚だしいものと思ひます。それではいつまでたつても信仰にはいれないでせう。

また「人眞似のやうで」云々の御言葉がありました。凡べての文化は若干の創造發明以外は悉く人眞似であります。發明にしたところで純粹の創造ではなく先人の残したも

のへ若干の修正をなしたのに過ぎません。あなたも郵便を出され、汽車にもお乗りになるでせう。人眞似ですよ。御飯を頂くとき茶碗も箸も御用ひになるでせう。それも人眞似です。第一はなしをなさるのに言葉をお使ひになるでせう。それも人眞似なのですが如何ですか。かう云ふ人眞似はおかしくないが、念佛の人眞似だけはおかしくないといへないといへないに結構です。そんなにかたくなになつてはいけません。竹田默雷禪師の都々逸に「そんなにすねずとこち向かしやんせ、味な話があるわいな」と云ふのがあります。僧とは和合、そんなにすねず、もつとふところを開いて佛書も讀み念佛もするやうになつて下さいまし。さうすれば必ずあなたの信心も開發されますから……

お断り 先月號所載の童話「鬼と善助」は牧野淳氏作のものではありません。訂正致します。



再生の歩み

英霊のため何うぞ前進して下さいませ

故陸軍中佐高橋四郎末亡人

高橋 安子

昨年の七月十日に東京特設中等教員養成所を修了致しました私は、今母校の東京府立第三高等女學校に奉職致してをります。今年は丁度同校の創立四十周年を迎へました。昔私がこの學校に入學致しました春の盛りに創立十五周年記念の式が執り行はれました。それから早や二十五年の星霜を過しまして、今同じ學舎に教師としての自分を見出すことはま

ことに感慨無量でござります。

恐らく亡き夫も思ひ及ばなかつたことでござるませう。

私の一生は長いものであるから、將來どの様なことに逢ふかもわからない。その時にあ

たつて困らないやうに、もつと勉強をして、何かの資格を得ておいてはどうか？」と勧め

られました。又日露戦争に夫を出征させ、大勢の子供をかゝえて、しみじみと將來のことを考へたといふ親しいお友達の母上たちも、「今のうちに専門の道に進んでおいては？」と心から教へて下さいました。

それでそのにそのやうなこともせずに結婚生活に入つてしまつた私は、夫の戦死にぶつかり初めて自分のおろかさを悟りました。家庭に入つて既に十數年を過した私に、今更何が出来でござるませう。夫が言ひ遺していつた言葉「今の世の中に爲すこともなく日を過すのは一番の不忠であると思ふ。必ず陣分の御奉公をするやうに」とのことにも従ふ道がござるませぬ。夫が居ればその方の用事も澤山ござるますが、それもなくりました。子供も早や大きくなり手がかりません。小人は閑居して不善をなすといはれますが、それ程でなくても無爲に暮すといふことがどんなにかつまらないことであり、又色々よくない結果を招くかはよくわかつてをります。空しく手をつかねてゐてはならぬ、過去に提

はれてはならぬ、せめて何か御國のお役に立たねばならぬ、子供の將來を思ふにつけてもしつかり立ち上がらねばならぬ、私は遂に堅く決心を致し、再起の道を求めました。

私は方々の専門學校の規則書を取つて研究しましたが何處の學校にも入學試験がありません。英語、數學、國語、何一つ受験が出来さうにもありません。獨學で勉強をするか、聽講生にでもなつて文部省の檢定試験を受けようかしら、とも考へました。けれど、これもなかなか難しうです。この時何んと有難いことでございませう。皇室におかせられましては私共遺族の上に深き御恩みを垂れさせられました、厚生省文部省は私共の爲に昭和十四年九月初めより東京市小石川區大塚窪町の東京女師高等師範學校内に、東京特設中等教員養成所をお開き下さいまして、二ヶ年の修業の後、家事、裁縫の中等教員としての資格をお與へ下さることになりました。私は暗夜に燈火を見出したやうに嬉しく、有難く、救はれた氣が致しました。中學生である子供か

ら本を借りたり、時には教つたりして一心に數學や國語の受験勉強を始めました。入學試験の結果幸ひに三十二名の第一期生の中に加へていたゞき、入所を許されました。その頃に私の書いた感想ですが、次のやうなものがあります。

昭和十四年一月四日午後十一時五十五分に私は夫の嚴死を知つた。それからの私は大きな悲しみと、苦しみの間にはさまれて、自分自身を扱ひかね、持ち餘してゐたのであつた。私はつく／＼と人生に希望を失つた者の生きてゆく苦しさを知つた。輝かしい朝が訪づれても私は、人々の起き出で、今日の仕事に取りかゝる姿を羨しく眺めてゐるだけで自分に今日の日が與へられたことが苦痛にさへ感じられるのであつた。こんな自分に頼たな希望を與へ、生きる歡びをよみがへらせてくれたものは今度の入所であつた。一生徒としての今の生活は過去十五年間の家庭生活にはすつかり内容の變つたものであつて、夢ではないかと思ふことすらある。慣れない學

生生活であるから、色々と苦痛を感じることもあるけれど、それ等の苦痛は皆心樂しい苦痛であつて、今の明け暮は一ヶ月間までのそれとはすつかり面目を新たにしたものである。闇の中にほのかた光を見出した時のやうに、寒い冬が去つてそこはかとなき春の息吹を感じた時のやうに、限らないよろこびに胸を一杯にして、来る日／＼を生きる感謝で過してゐるのである。闇が永かつただけ、寒さが嚴しかつただけに、その感謝も一入深いのである。私は今専心に勉強出来ることを、しみ／＼と有難く樂しくうれしく思ふのである。又境遇や年齢は皆違つてゐても、夫を御國に捧げたといふ共通點を持つてゐる級友の集りは云ひやうもなく親しいものである。すつかり元氣になり、噓やかになつた私を夫の靈も、どんなにかよろこんで見てゐて下さるであらうと信じ、新生活に心からの感謝を捧げてゐるのである。

これは私の入所當時の喜びでございまして省みて養成所の二年間はほんとに思ひ出深い

ものでした。畏くも昭和十五年十二月三日には、皇后陛下の行啓を仰ぎ奉りまして、神しき御姿を齋宮堂に拜し、その御前で君が代の國歌を奉唱致しました時にはただ感激に溢るる涙をとどめることが出来ませんでした。又私共養成所生徒の作業を台覧いたさしました。わけても列立奉拜の光榮に浴しましたことは、亡き夫はもとより、一門一家のこの上もなき榮譽でござりました。この日の光榮を思ひますにつけても、私共鴻恩に應へ奉ります爲に、遺族としての道を踏み違へませぬやう、精進を積んで行かなければならぬと深く深く心に誓ふのでござります。尚、皇后陛下には楓の苗、或は草花の種子を御下賜下さいました。年々に伸びゆく楓の若木に美しく咲き匂ふ草花に、大御心を拜し奉りまして、忝けなさにたゞ／＼感激致すばかりでござります。又、朝香宮殿下には學習を御台覧いただき、修了式の日には北白川宮大妃殿下、故永久王妃殿下が入所中の成績品を御台覧下さいまして、その光榮と感激は終生忘

れ得ないものでござります。私共は學生とは申しながら皆家庭を持ち、父母に仕へ、亡き夫に付き、子女を養育しながらの勉強ですから、なかなか容易ならぬものがありました。その上幾年かは家の中にあつて、比較的自由的暮し方を致してゐましたのに、團體としての行動をしなければならぬ學校生活に移つたので、その苦しみも一通りではありませんでした。凍る冬の夜も更けて一人木枯の音を聴きつゝ埋火に手先を温めては、幾度やり直しても裁縫の思ふやうに出来ない時には遂に覺の涙をこぼしたこともありました。晝間の疲れで眠くて仕方がなくても、眠つてはならぬと努力する苦しみも、一晚や二晩ではありませんでした。又ある時は自分の選んだこの道は自分には不相應な道ではなかつたか、と激しい自責の念にかられることもありました。病む子の額に手拭を取りかへつゝ、明日の試験を思ひわづらつたこともありました。つい自分の仕事に追はれて、休みの日にも連れ立つて外へも出られない不甲斐なさを、子の寢

顔に詫びたこともありました。夕日に照されて家路を急ぐ我が影の淋しさに胸を一杯にしたこともありました。

まことにたゞ／＼しい歩みながら、限らない先生方のお導きにより、私共は一人も缺けることなく、全部揃つて二年を無事に過し、十六年七月十日には修了しました。それぞれ故郷へ歸り、高等女學校に奉職することゝなつたのであります。この二年間を故郷に残しておいた子供達、母と共に寄宿舎で暮した子供達、まだ乳の離れなかつた幼い人も、始終熱を出した弱い子供も、母が學校へ行つた後を追つてなか／＼泣きやまなかつた子供も皆揃つて大きくなり、元氣になつて、強い子供になりました。妻はなくても父の靈はきつと子供の上を守つてゐたのでござりませう。養成所長下村壽一先生は私共に清節、精進健康の三つを座右銘とせよと御さとし下さいました。

今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてといで立つ吾は

と私共の夫はただ日本國民たるの道をつくしただけでござりました。それも常に戰場に屍をさらすこそ武人の本懐であるといつてゐましたから戦死こそ定めし本望でありましたでせう。それですのに、忝なくも靖國神社に護國の英靈としてお祀りいただきますことは何といふ光榮でせう。その上私共遺族は限りなき皇恩に浴し、厚き御庇護を受けまして再起の道に立たせて頂いたのです。私共は常にそのことを忘れず武を以て國に仕へた夫に代り、文を以て御奉公申し度いと思ふのでござります。これまでお教を受けた身は今教へる身となりました。純眞な生活の清い體を一身に集めて初めて教壇に立ちました時は、何ともいへぬ感激に身の震へる思ひが致しました。男の子のみしか持たぬ私には女の子は一入やさしく、愛らしく思はれました。

吾兒のみをおのが光と生きてこし

我にたまはる教へ子あまた

私もかつては五年間學んだ母校ですが、生徒は妹、自分は姉のやうな氣がして一段と

親しく思はれるのであります。今こそ國運の進展にともなひ將來の女性に待つべきものが限りなくあります。少女のたゞやかな双肩には明日の日本の盛衰がかゝり、若やかな生命には大東亞建設の十となる一つの小石としての使命が授けられてゐるのでござります。生徒達よ、どうぞ立派な皇國の女性になつて下さい。私は毎日それを祈りつゝ、教壇に立つてゐます。教へる術は拙く、學問は浅い身ではござりますが、この祈りだけは眞剣なのであります。

夫は出征の時私共に「自分に萬一のことがあつても後は朗かに暮すやうに」と申し残して參りました。けれどやがてその時が實際に來た時、私共の心はなか／＼にその言葉のままにならぬことを悟りました。理性はよくその言葉を理解してゐても、心を御する道の如何に困難であるかを感じました。それから四年、やつと私は夫の言葉に近づきつゝあることを感じます。かつては辛しと見た道も道は同じながら、今は霜の深い朝も、雪の夕も、

身も軽く心も晴れ／＼と歩んでゐます。そして御國の御爲に少しでもお役に立てたならと思ふと黎明のほのかな光にも似た明るさが胸の隅から擴がつてきて、今までの苦難の影は一つづつ消えてゆくのであります。その暖の光の彼方より「前へ進め！」と夫の力強い聲が響いて來るのでござります。

私共と同じやうな境遇にをられます方々どうぞ悲しみの中から、苦しみの中から一日も早く立ち上つて下さいませ。お上は私共の上に救ひの手をさしのべてゐて下さいませ。

安らかにねむれとぞ思ふ君のため

いのちさ／＼げしますすらをのとも

と賜はりました。皇后陛下の御仁慈に應へ奉り、英靈を安ずるためにも、どうぞ前進して下さいませ。努力をしてゐる母の姿は子供の上にもきつとよい感化を與へることでありませう。御戰がこれから何年續きませうともお互にしつかり手を組んで銃後皇國の女性の道をつくしてゆきたいと祈るのでござります。



上手な三助

和田かつぢ

三助「旦那ビルマ戦線は百三十度だつて云ひますね……」
「ウム……熱くかなんかないよ……この位……」

「ドイツは英國に數千トンの爆弾を落したさうだ」「で拾つた奴は一割貰へるのか？」

お禮 川口久



快報は鳴る！ 川口久
「ホホウ鳴るにしろや早いと思つたら戦捷ニニースでねえだかよ」



漫画月報

(四 月) 一善崎山

五日以来の印度洋の大戦果
撃沈敵艦六十四隻、撃墜敵機百二十機

ナメルない



英印會談
國民會議派、クリツプス案を拒否。

十一日
バタアン半島
完全
攻略！



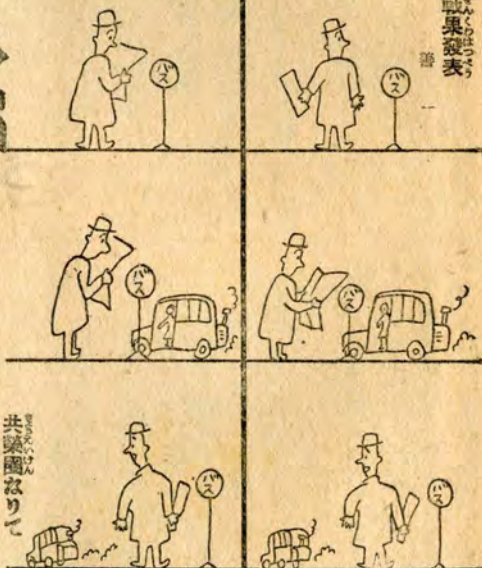
女流作家 川口久
 「まア今度は長編モノにかかつてますの」
 「いいえ大東亞戦争の慰問文ですよ」



まじ州
 本株りと松か?

和田かつち
 共産國なりて
 「日本へ視察旅行
 に来た歸つた新人
 にこんな風景もあるだらう」

大戦果發表



三十日
 翼替選舉日
 業障者
 二割減の
 好成績



二十日
 ブラジル
 邦人を
 壓迫

十八日
 午後〇時半頃
 敵機初空襲
 九機落す



十四日
 ラヴアル
 佛主席
 に立つ
 歐洲新建設

會 の た よ り

六月分から本會々費(年額)を

金一圓五十錢に改正いたします

前號所載の通り郵税の値上げのことがあり本會活動の使命がいよいよ重大化して來たため、本會々費を六月分から年額金一圓五十錢(郵便共)に改正いたします。従つて例へば本年十二月分まで御納入の方は十一月分にて前金切れとなります。何卒御諒承下され倍舊の御援助御指導の程を偏へに願ひ致します。

會員及び愛讀者の方々にお願ひ

◎浄土の書店賣りは中止致します。

◎會費未納の方は至急御納入願ひます。

本誌の讀者はその殆んど全部が會員であり月極の讀者であります。然し本會の趣旨を宣傳し、一人でも多くの方々に宗祖の御遺徳を仰ぎ、以て日常に喜びを感じていただくために若干部數を日本出版配給株式會社を通じて一般書店に出してをりました。しかし部數が僅かであつても、返品がどうしても出ます。用紙の豊富な時分はそれでもよろしいでせうが、物資の大切な現下の時局に少

中村屋相馬黒光氏

降誕會お賽錢を

本會資金に寄附さる

(新宿中村屋の恒例降誕會にあがつたお賽錢を別項黒光氏の書翰にある通り、本會活動資金にと御寄附下さいました)

冠省 毎度浄土御發送のお手數を相かけ恐縮に存じ居り、戦地より唯一の精神の糧なりと喜ばれ候、何れよりも嬉しく有難く候、これ偏へに皆さまの御努力のためと感謝にたへざることに御座候。さて本年の降誕祭はひとしほ淋しくお供へのものさへ思ひのままに相成らず、誠に相濟まぬ次第と存じをり候が、例年の如くお賽錢別紙の通り舉り、願客の方々恭々しく合掌せられし趣、病床にて聞き有難涙に咽び申候が、貧者の一燈ならねど人様の佛心の發露

の一端と押しいただき申候へば、

そのままそつくりお渡し申上げ、

浄土御發送の方にでも御使用下さ

れ候はば、この上なき満足にこれ

あり候、右使ひの者を以ておと

だけ申上候、勿々

四月十七日 相馬黒光

法然上人續仰會御中

◇小生某工場にて養成工として半

年ばかり働いてゐる内に一寸した

ことから健康を害し以今入院して

ゐます。先日知人から浄土をもち

ひ拜見させてもらつてゐますが、

おかげで精神上に宜しいとみえ、

日増に病氣もよくなつて來まし

た。自分の身體であつて同時に大

君の身體であることを思つて、こ

んな身體では申し譯なく存じてゐ

ます。その内に滿洲國の義勇軍に

ゆく決心をいたしました。今後と

何うぞ御尋き下さい。(栃木縣芳

賀郡中川村大森昭喜)
◇大島は熱帯に屬して南國と云は

しの無駄でも出してはいけません。この立前から先月號を以つて店賣りは一時中止することに致しました。従つて從來書店からお買求めになつてをられた讀者には誠に御迷惑ですが、淨土が店頭に並ぶことが御座いませんで、直接本會宛入會御申込を願ひ度く存じます。

またこれまで會費の前金切れとなつた場合には、その旨御通知致すとともに會費御納入のある時まで雜誌を送りしてゐました。しかし何かの御都合でその間が長くなる會員の方もありましたが、今後は場合によつては雜誌の發送を一時中止して會費御納入を待ち、それから引續いてお送りすること致します。従つて何卒會費未納の分のある方は至急お納め下さるやう願ひ申上げます(勝手ながらこれを以て會員各位への通知にかへます)

れるところですが、もうとつくに櫻は散つて桃が咲いてゐます。櫻の木は山奥に一本、隣村の國民學校に一本、もつと先の村に一本と三本しかありません。淨土を拜讀し、再讀三讀するに従つていよいよ興味深く爲になると思ひます(鹿兒島縣大島郡龍郷村麻行雄)

◇信仰とは何か、どうも因縁と申しますか仲々に到達いたしません八十の手習にていよいよ願ひではあるが思ふやうにはなりません。年こそ老ひましたが増産の第二線となつて働いてゐます。つみとがを積み重ねたるこの身にも磨をかへす齡のうれしさ。(滋賀縣甲賀郡貴生村牛飼武村治兵衛)

◇中村師著の日常勤行式講義拜讀いたしました。不徳の身の御指導のおかげにて日増に法味を加へつつ生活布演の一途を辿り行く身を感謝しをります。本島にも天理教、佛立講、基督教等もあり、新聞、雜誌もいろいろ入島して讀まれてゐますが、この三根村では全戸數の一割二分の八十一戸が淨土の讀者であり、これを淨土宗信者だけにみれば更に高率になりませう。ますます貴會の御隆昌と御指導の深きを仰ぎ申したく重ねてお願い致します。(府下八丈島三根村安保安覺)

◇おかげ様を以て念佛生活を味はせられをり、特にこの時局下に當り諸所説が生活上最も適切なことを痛感し只管貴會の御恩を感謝する次第です。(臺北市式成町四ノ八福永藤八)

◇淨土新年號で實話たんべん三題を拜讀いたし佛の信仰ふかい或る日の祖父母のお話に、佛様のお救ひにあるのだと如來さまのお慈悲に感泣してゐます。また花田順往氏の講話に感謝いたしてゐます。

◇皆さまお變りもありませんか。小生おかげ様を以て日夜無事軍務に服してをりますれば他事ながら御放念下さい。當地にをりますと銃後の皆々様の元氣に奮闘下さる御様子が何より心強く、何一つ心おきなく努力出来ることに感謝致します。(中支戦線にて植木龍造)

◇佛さまのお恵みを感じたいし、一粒二粒のお米に感謝いたしたいてゐます。犬でも佛様を拜むのに人間に生れて佛さまをおがまなければ犬におとるからみ佛様を信ずる皆々様一億一心になつてお國のため身のために念佛を申しませう。(青森縣東津輕郡平館村丸尾久二)

◇法然上人さまの正しき御教、深き信仰の下にイバラの如き人生を強く正しく生きようと思ひます。(徳山市第三海軍燃料廠鷹ヶ浦寮田中端)



小説

遺

蹟

小島健三
齋藤清畫

法然上人の弟子が、
『師の往生の後、いづこを以て御遺蹟とした
らよろしいでせうか』

と訊ねると、上人は、

『わしには遺蹟はいらない、わしの亡くなつ
た後は、いかなる邊鄙の海人漁夫のとまやな
りとも、念佛の聲のするところだにあらば、
それこそ遺蹟である』

と答へられてゐる。

○

享保のころ、近江馬場の宿に、多兵衛とい
ふものがをりましたが、毎年一度づゝ本山へ
參詣するのを何よりの楽しみにしてをしまし
た。

ところが、同じころ、京都西陣に菱屋丁玄
といふ人がをりまして、これも大層な信者で
毎日かゝらず本山へお詣りしてゐましたが、
ある時、御堂で多兵衛と逢ひ、その熱心な様
子を見て頼母しく思ひました。

丁玄には、貧しさうだが、實に殊勝な多兵
衛の信心に心をうたれたのです。それからと
いふもの、毎年の春の上京を心待ちにするや
うになりました。

そして、いつしか多兵衛は、上京の度毎に
丁玄の家を宿として御法義を語りあひまし
た。

ところが、ある年、多兵衛の上京しないこ
とがありました。

了玄は心配して、

『あの多兵衛に限つて、無事でゐたなら、お詣りを缺かす筈はない、これは、ひよつとすると御不幸でもあつたのではあるまいか、それとも、病氣でともあらうか、何せ心配なことだ、現世の交はりが多いが、未來かけての友達といつたら、あの多兵衛さんより外はない、何とか様子を知りたいものぢや』

と、了玄は家僕をつれて、近江へ出かけました。

もうぢつと家で考へてばかりはゐられなかつたのです。

やうく近江の馬場の宿へやつて来て、茶店へ腰をおろし、

『この邊に多兵衛さんといふお方はおゐでなさんか』

と、訊ねますと、茶店の亭主は、頭をかしげて、

『はて、多兵衛さん……』



と、考へ込んでしまひました。了玄は心配になつて、

『かうと思へば、多兵衛さんによろ尋ねておくんだつたが、たゞ近江馬場の宿とだけけり聞いておかなんだが、この馬場の宿に多兵衛さんといふ名のお方はあるだらうに……』

と突込んで尋ねますと、亭主は、

『へえ、多兵衛はをりますが、旦那さまのお尋ねするやうな多兵衛さんではございません、いたつて下賤な者で……』

『いや、如何に下賤な者であらうと、多兵衛さんの家は何處ぢや』

『いえ、その多兵衛といふのは馬子でございますよ』

『馬子？』

『へえ、この邊では多兵衛などと名を呼ぶ者は、一人もをりません、念佛馬子、念佛馬子といつてをります』

『それぢや、そのお方だ、その念佛馬子さんのお方は何處ぢや』

了玄は、すっかり悦んで、茶店に多分に茶

代を置いて、案内して貰いました。

多兵衛は、丁玄と知るや、走り出て手を取らんばかりに喜び、

『ようこそお出で下されました、私は長い間病氣をしてをりまして、今年のお詣りを残念ながら缺かしました、あなた様は、お達者で念佛を喜ばれますとは、おめでたうございませす』

と、掘立小屋にたゞ簾を敷いて住んでゐますのに、少しも恥ぢる氣色もなく、掻き入れて、夜の更けるまで御法義を語り合つて、稱名念佛してをりました。

あくる朝、別れを惜しんで、丁玄は懷中から金を取出して、

『あなたは貧しさをおいとひなさるまいが、私は見るに忍びません、一味の信をいたゞいた兄弟として、ほんの持合せの金を參らたゝい、どうか、これで風を防ぐほどの物なりとお求め下さい』

と云ひました。すると、多兵衛は押し斥け

『決して、私の事などお心に掛けて下さいませな、私は自分の力で生きてゆく、これが一番いゝ事だと思つてをります』

多兵衛は、どうしても受けませんでした。

仕方なく丁玄は金をしまつて、

『私の拙い心に比べて、合方しうと思つたのは、誤りでした、それでは、これまでの志の通りに、もとのやうに御交際を願へば浮世の思出この上もござりません』

と、わびました。

こんな變つた多兵衛でしたが、どんな荒馬でも不思議と多兵衛の手にかゝると、猫のやうにおとなしくなります。

『馬には念佛が利くらしい』

と宿の者が惡口を云ひました。

しかし、多兵衛は、村の評判や惡口などには耳を傾けず、本願を信じて、馬を曳きながら念佛を申してゐました。

藁屋丁玄の噂も、いつとはなく村の者に傳

はり、

『念佛馬子の馬鹿さかげんには開いた口が、

ふさがらんわい、わしなら有難く頂戴して立派な家を建てがな』

『さうとも、折角、寶の山に入りながら、根が馬鹿だから、仕様もない』

と藤口を叩きました。

ところが、當の多兵衛は、一向に頓着なく南無阿彌陀佛を唱へながら、馬を曳いてゐました。

ある日のこと、多兵衛の馬に、長州藩の武士だといふ立派な侍が乗りました。

野鈴を入れた頬白が、松のつてつべんで美しい聲を張つて鳴いてゐました。

『馬子、この邊に腕の立つ者がゐるか』

多兵衛は、武士の問ひに答へかねて、

『腕の立つ者と仰しやいますと、何んでございませう』

『はつ、は……判らん奴ぢやな、わしの様子を見ても判りさうなものぢや、劍客がをるかと思つてをるのだ』

『劍客、さうでございます、劍道の達人なら

京や大阪へ參りますと、澤山にあらつしやる

「さうでございますが、此の邊には、まだ噂を聞いてをりません」



『さやうか、馬子、そうやつて毎日街道を往復してゐるからには劍術の名人も乗せたことがあらう何うだ面白い話があらば聞かせてくれぬか』

『旦那さまは、劍術の御修業にでもおゐでになるのでございますか』

『さやう、かう見えても長州では、もう習ふ可き師がないので京、江戸を巡り良い師をとつて、日本一の劍客になるつもりぢや、それで劍客を訊いてをる』

『さやうでございますか：南無阿彌陀佛：南無阿彌陀佛：』

『これ馬子さいせんからその方念佛を唱へてゐるが耳ざわりだからよさぬか』

『念佛でございますか』

『さうだ』

『弱りましたなあ』

『何が弱る、以後、念佛はならぬぞ、時に馬子、この邊で何か名物があるだらう、わしは酒が好物で、酒の肴に寄する名物を存せぬか』

『私は、酒を頂きませんので、一向に存じませぬ』

さう云つて、いつもの癖でまた念佛を唱へました。

『馬子、申したな』

武士の額には、臍癖の青筋が、むく／＼と立ちました。

多兵衛は、何のことか別になかつたのですから、

『何んでござりませう』

と、背後を振かへりますと、烈火のやうに怒つた劍士が、奥歯をかんでゐます。

そして、嘴みつくやうに、

『あれ程、念佛を唱へてはならぬと申し置いたに、拙者を愚弄する不屈者……』

憤怒のために武士の身體は、わな／＼と顫

へだしました。

『これは、お耳ざわりな念佛を申しまして、とんだ失禮を致しました、何うぞ御勘辨をお願ひ申します』

『いや、ならぬ』

火をはくやうな侍の聲です。多兵衛は、謝罪をしても無駄だと思つたものか、また念佛を唱へて叱られるなら、仕方ないと諦めたものか、そのまゝ、口を噤んで黙々として馬の手綱を曳き、島本宿の本陣にさしかゝりました。

すると、例の武士、

『その分には捨て置かぬ、此方へ来い』

さう呼びざま、ひらり馬から飛び降りました。

あまりの大膽に、宿の者たちは、飛びあがらんばかりに驚きました。憤然と降りた武士は、タタ……と前の廣場に駈けて行きます。

そのたゞならぬ様子で、多兵衛は、手討にされるのが、誰の目にも判りました。

『多兵衛さん、馬はわしが引受けた、逃げる

なら今のうちや、早く裏山へ逃げなされ』と教へる者がゐます。

『だから云はぬ事ではない、馬子の癖に殊勝らしく念佛などを唱へるから、この態ぢや、

これに、こりたら二度と再び念佛などを唱へるでない、早く消せろ』

どんと背中を突いた者もゐます。

しかし、多兵衛は、少しも騒ぎませんでし

た。

『馬子、此方へ参れ』

侍は、ぎろりと鋭い眼を向けて叫びまし

た。多兵衛は、おとなしく、呼ばれた方へ足を運びます。

『念佛馬子がお手討ぢや、見に行かう』

わい／＼宿の者が駈け集つて來ます。その中にあつて、多兵衛は、顔色ひとつ變へず落

着いて、示されるまゝに武士の前に坐りました。

武士は、ぎらりと刀を抜き放ちました。そして、憎々しげに、

『無作法者の、武士の馬の口をとりながら、

死人を乗せたる如く念佛を申し、毎度咎めたるに、一向用ひぬとは不屈千萬、手討にするから覺悟をいたせ』

はつと睨みました。

多兵衛は、覺悟の眼をとおちながら、心靜かに念佛を唱へました。

『南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛……』

『覺悟はよいかつ』

『南無阿彌陀佛……』

水の如く靜かな多兵衛の姿に刀を振被つた武士の心根が動かされました。

まさに宿善開發の時が到つたのであります。

武士は、自分の修業のいたらざるに愧ぢてその場に兩手をついて平伏しました。

この後、武士は街道往來の時は、馬場の宿に念佛馬子を訪ねて、彼の法話を熱心に聴きました。

時をへだて、この邊の宿場の而も馬子に、法然上人の御遺蹟は、歴然と見られるではありませんか。

法語
解説

救ひはただ一つ

法然上人御法語(その六)

中村 辨 康

法語

大原にして聖道淨土の論議ありしに、法門は牛角の論なりしかども、機根くらべには滅空勝ちたりき。聖道門はふかしといへども時過ぎぬればいまの機にかなはず。淨土門は淺きに似たれども當根にかなひやすしと云ひしとき、末法萬年、餘經悉滅、彌陀一教利物偏増の道理において人みな信伏しき。

(法語抄三二「勅修傳第六」)

解説

大原談義は顯眞法印の發起に依つたものではあります。事實は他宗の學者達を前にした堂々たる新宗宣言だ

つたのです。

顯眞法印は天台座主になつた程の人で、お父様は藤原美作守顯能卿、お母様は參議爲隆卿の娘、お師匠様には後白河法皇第二の皇子梶井宮最雲法親王を頂き、學問は檀那流の嫡流惠光房の大律師澄蒙の法孫にあたり、密教は法曼流の祖相實法印から灌頂を受け、顯密兩教に互る大法將でありましたが、壽永二年九月に第六十代の天台座主明雲大僧正への賞をゆづられて『法印』に叙せられ、建久元年三月には六十一代目の『座主』に補せられました。次いで同年五月權僧正に任ぜられ、同三年十一月六十二歳で念佛唱名の中に安らかに御往生なさいました。この法印が念佛の信者になつたのは文治二年秋の大原談義の時からでありまして、その年の十二月には姨の

禪尼に手紙を以て念佛の信仰をすゝめて居り、翌年の正月には大原勝林院に不斷念佛を修し、同年の十月には大原に五の念佛道場を建て、天台座主になつてからは叡山法華堂の夜々の行法に高聲念佛の一條を加へなどして色々と念佛弘通につとめられました。

夙に求道の志はあつたけれども初めは天台の學問にいそしんで居ました爲に、承安三年四十三歳になつてやうやく大原の勝林院に籠居して後生を求められるやうになつたのです。然しそれから四年目に叡山法華堂の一和尚位をつとめ、またそれから八年目に法印に叙されたなどしたほど、天台一山の中で押しも押されもせぬ人であつたから中々隱退するわけにもいかなかつたやうです。

でも道を求める氣持は年と共にいよく深く強くなつて同門の永辨法印のすゝめに従ひ、遂に法然上人に遭つて話を聞かうと決心しました。それは五十六歳の時でした。それで相模房なる者を使者として上人に面會を申し込み、西坂本で一度語り合ひましたが、文治二年の秋になつて魚山大原寺勝林院で、各宗の碩學と共に法然上人に對して一日一夜の質問をなし遂に念佛の信仰にはいることが出来たのであります。

そのときのことを勅修傳には

「百日の間大原に籠居して淨土の章疏を披閱したまひしうち、すでに淨土の法門をこそ見立て侍りにたれ。

來臨して談ぜしめたまへと仰せられたりければ、文治

二年秋のころ上人大原へ渡りたまふ。東大寺の大勧進

俊乘房重源、いまだ出離のみちを思ひ定めざりけるを

哀みたまひてこの由を告げ仰せられたりければ、弟子

三十餘人を相具して大原にむかふ。勝林院の丈六堂に

會合す。上人の方には重源以下の弟子どもそのかずあ

つまれり。法印の方には門徒以下の碩學ならびに大原

の聖達坐しつらなれり。論談往復すること一日一夜な

り。上人、法相、三論、華嚴、法華、眞言、佛心等の諸

宗にわたって、凡夫の初心より佛果の極位にいたるま

で、修行の方軌、得度の相貌つぶさにのべたまひて、

是れ等の法、みな義理ふかく利益すぐれたり、機法相

應せば得脱くびすを廻らすべからず。たゞし源空ごと

き頑愚のたぐひは更にその器にあらざるゆへにさと

がたく惑ひやすし。しかる間源空發心のうち聖道門の

諸宗につきて廣く出離の道をとぶらふに彼も難く之も

かたし。是れすなはち世くだり人愚かにして機教相背

くゆへなり。然るを善導の釋義、三部の妙典のこゝろ
 彌陀の願力を強縁とするゆへに、有智無智を論ぜず、
 持戒破戒をえらばず、無漏無生の國にむまれてながく
 不退を證すること、唯だこれ淨土の一門、念佛の一行
 なりとして、法藏比丘の因行より彌陀如來の果德にいた
 るまで、理をきはめ詞をつくしおはりて、たゞこれ涯
 分の自證をのぶるばかりなり、全く上機の解行をさま
 たげんとにはあらずとのたまひければ、法印より始め
 て滿座の衆みな信伏しにけり。かたちを見れば源空上
 人、まことは彌陀如來の應現かんとぞ感歎しあへりけ
 る。法印香爐をとり高聲念佛をはじめ行道したまふ
 に、大衆みな同音に念佛を修すること三日三夜、こゑ
 山谷にみち、ひびき林野をうごかす、信をおこし縁を
 結ぶ人おほかりき」
 と述べて居ります。

此の時に集つた人々は主催者の顯眞法印を始め次ぎの
 やうな名高い人達でした。

慧光房永辨法印 檀那流澄豪大律師四上足の一人です

の義を慧光房流と云ひます。

毘沙門堂智海法印 やはり澄豪四上足の一人です永辨と

並び稱せられた學者であります
 實地房證眞法印 慧心流檀那流を兼學して居る當時第

一の學者で一切經を十六返讀みかへし大概の文句
 は記憶して居たと云はれます。澄豪と共に『大師
 號』をと衆議されましたが、たゞ『大』の字のみ
 を申し請けて澄豪を『大律師』證眞を『大法印』
 と云ふことにしましたと云ふことです。慧心流の
 師は隆慧已講、檀那流の師は永辨法印、密教の師
 は穴太流の祖大慈房聖昭で有名な重宴阿闍梨と同
 學であります。

強膽
 化力

小心恐怖症

矯正新法
 說明進呈



◇小心恐怖症 ◇悲觀症 ◇產恥癖 ◇小事性くお
 くびやう癖等にあわされて物事に大膽さ
 がなく心配し無闇に人を恐れ物事由大膽さ
 目上の人を恐れる事にあたりて物事由大膽さ
 なげればいくら勉強し學科が出來ても大膽さ
 試験場や他人との應對にあたりて大膽さ
 り出す事が出て來ないかやうな人歩短時日大
 膽明朗となり好評中「淨土讀者」と記入し至急
 出來る新自宅矯正法が發售され無代進呈す
 ハガキ申込次第「内容説明書」

申込所 東京市澁野川區西ヶ原町三四六 瑞穗社研究所

高野山學洞院明遍僧都 少納言信西入道通憲の息で、

兄弟に出家したものが多く何れも有名です。範雅

法印、範信僧都、圓顯阿闍梨、靜賢法印、澄憲法

印、寛敏法眼、覺憲僧正、勝憲僧正、行憲阿闍

梨、憲俊已講、及び憲曜、寛兼、憲慶等があり、

また出家した甥に解脫上人貞慶や聖覺法印などが

あります。しかもこれらの碩學高德の人達が皆な

この明遍僧都には一目も二目もおいて居たと云ひ

ます。

笠置解脫上人貞慶已講、少納言通憲の孫、貞憲(飛彈

攝津守少納言右中辨從四位下)の子息で南都に於

ける最も有名な學者です。樹尾の明惠上人と共に

『太郎、次郎』と稱せられました。法相宗に屬し

ます。

長樂寺阿澄房印西上人 建禮門院御落飾の時、御戒師

をつとめたほどの人であり、四天王として智惠第

一法然房持律第一葉上房(榮西禪師のこと)、支度

第一俊乘房と共に慈悲第一阿澄房と稱せられまし

た。

東大寺大勸進俊乘房重源上人 大系圖には紀季重の三

子季良季康重源とあり、異本紀氏系圖には季重の

四子季良季康榮西重源とあつて榮西と兄弟のやう

ですが、釋書には榮西は賀陽氏となつて居りま

す。俊乘上人は解脫上人を觀音のうまれがはりと

思ひ、解脫上人は俊乘上人を釋尊の生れがはりと

思ひ互ひに三禮し合つたと云ふ話があります。

此の外、覺什僧都、堯禪僧都、本性房湛敷上人、蓮契

上人及びその弟子十餘人、菩提山藏人入道安然、淨然法

眼、仙基律師、往生院念佛房、八坂大和入道見佛、俊乘

上人の弟子三十餘人など參會したさうであります。

當時に於けるこれらの一流の人達を前にして、暗に一

宗別立の宣言がおこなはれ、それらの人々をしてその新

宗を是認せしめたばかりでなく、むしろそれに驚歎し隨

喜せしめたのが大原談義だつたのであります。その中で

もとくに法然上人を信じその教に信順した人は眞實法印

明遍僧都、印西上人、大和入道見佛、俊乘房などであ

り、また眞實法印は法然上人を戒の師と仰ぎその人格と

學問とを尊敬して疑はなかつたと云ふことです。

この法語は或時播磨の信寂房に語られたものでありま

す。何時と云ふことは明らかでありませんけれども文治

二年の秋の大原談義以後であることは疑ひありません。また此の人は播磨揖穂郡日山大日寺の出身ですが、梅尾明恵上人が『摧邪輪』と云ふ論文を作つて法然上人の『選擇集』を批難したのに對して『慧命義』と云ふ書物一卷をあらはしてその摧邪輪を論破して居りますし、また毘沙門堂の明禪法印(智海法印の高弟)が選擇集を讀み嘆して『述懷鈔』なる一書をつくり、これをこの信寂房におくつて居るのですから學問的にも相當の人であつたことが推察されます。

この法語で見ると、大原での質疑應答は互ひにその立場立場でなされたのであるから議論は『牛角』であつて別段に優劣はなかつたけれども、さて佛教の方法論實踐論と云ふことになると、諸宗の立場は個人完成上の理想論であるから、社會的國家的な考へが足らず、また極めて高遠な理論であるだけに一般的にはむしろ空理の如くになつてしまつて、實際の役にたかないのでその點に於いて遂に屈服してしまつたものと見へます。

これに似て居る文句に『大原談義開書鈔』の中に『人をして欣慕せしむるの教門はしばらく淺近に似たりといへども、自然悟道の密意は極めてこれ深奥なり』

と云ふのでありますが、然しよく味つて見ますとその文句よりも

『淨土門は淺きに似たれども諸人に適し、聖道門は深しと雖も事實上適合せず』

と斷定されたこの言葉の方が痛切であり適切であります。何となれば『自然悟道の密意』とは成佛主義の『さとり』を佛教の最高理想とする考へに依つたものであつて、淨土門よりも聖道門の方が本筋だとする思想ですから往生主義の主張に立脚する人の言葉とも思へませんし、一步譲つて若し遠慮した言葉とすれば卑屈になりま

す。
淨土門から眺めると聖道門は單なる理論に過ぎません釋尊以來誰一人として成佛した人は居ないのです。世は何時でも五濁惡世であり末法なのです。阿彌陀經に釋尊自ら『娑婆國土の五濁惡世』と言つて居られます。

濁世——惡世——末世——末法——娑婆

言葉こそちがへ、意味はみな同じであります。それを世は段々末になるものとしたのは時代の『進展』を考へず本當の歴史性を知らなかつたからであります。

元來『正像末』の三時は精神的な思想の推移に名付け

たものだと思ひます。

何事でも創始時代は眞剣でありますが、馴れるに従つて段々生ぬるい氣持になつてしまふものだからであります。それを三つに分けて正法から像法すなはちまねごとの時代を経て末法と云ふ眞似も出来ない氣のぬけたやうになるとしたのです。だから精神的な氣合のやうなものであらふと思ひます。それを具體的に時代の實質の如くに考へたところに間違ひがあつたのです。私達の精神生活は何時も末法的なのです。何時も理想に對する實際の功驗は薄いのです。だから何時も彌陀の一教のみが『利物偏増』と云ふ一般大衆の爲の『利益』となるのです。この『末法萬年、餘經悉滅彌陀一教、利物偏増』の文句は『西方要決』と云ふ書物にあるのですが、その源は『無量壽經』の

當來之世 經道滅盡 我以慈悲特留此經一止
住 百歲 共有二衆生 值二斯經一者 隨二意所願一皆可二得度一

と云ふ經意に依つたものです

即ち末法萬年ののちには教へと云ふ教はすべてあれど無きが如く何の役にも立たないやうになるが、ひとり

念佛往生の教のみは有効に働いて、凡ての人々の願ふまにみな『度』即ち『救ひ』が與へられると云ふ釋尊の所説に依つて『彌陀一教利物偏増』と云ふことが確信を以て云はれたものでありませう。

實際上聖道諸宗の教は「さとり」を説くものであり人の成佛を要請するものですが、それは結局教へのみであつて、實踐にうつして見たところで『像法』即ち形式だけに過ぎないのであり、實質的には『末法五濁』であつて奏效しないのであります。

つまり信なき行は役に立たないからであります。此の故に信を中心とする『念佛行』の教こそ本當に人間生活に役立つものであることが、初めからはつきりして居たと思ひます。ことに日本的なる意味に於いて法然上人の宗教觀はむしろ劃期的であつたのです。之れは史家の均しく認むるところで、日本佛教は法然上人に依つて始めて信仰と云ふものを持つことが出来たのです。それまでの信仰は信仰と云ふには餘りに皮相的であり利那主義であり且つ特殊の人だけのものであり一般民衆は殆んど除外されて居たものであります。この意味から言つて此の御法語は私達に取つて誠に意義が深いものと思ひます。

編輯後記

◇身體が第一の資本であることは今も昔も同じですが、現下のやうに宇内狭しと活躍しなければならぬ時に當つて、尙のこと逞しい健康が必要で。

◇健民運動が盛んなのは結構ですが、國民體位の向上は一時の運動だけで實現されず、十年二十年の歳月を要するものです。

◇臨時徴兵検査に立會つた徴兵官の感想に、胸部疾患が目立つて多く、しかも相當に症状が進んでゐるのに検査で初めて氣のついたものもあり、なかにそれで野球、ラグビー、ボートなどの選手をやつてゐたといふものもあつた、と云つてゐます、油断は大敵、先づ自分の身體をほんとに愛さなくてはなりません。

◇世界で一番大きな島がグリーン

ランドで、次がバブア島であり日本九州は第八番目の大ききでセレベス島より少し大きい島です。一國の經濟上の力は物質の多寡によつてだけで決まるものではありませんが、しかし何んと云つてもこれだけの大戦果を擧げ、これから更に本格的戦争に乗り出す以上、物質上の不自由さをもつと大きくなつても當然のことです。

◇それと同時にわが國の幾十倍もの土地を占領し、指導してゆく上に、長期總力戰の實を發揮してゆかねばならず、國家は一人の力と云へども必要としてゐます。

◇過般の敵機來襲はいろいろな意味で實によい経験でした。普段の訓練にも云はせて活躍したことや、又演習では氣のつかなかつた點について一層よく注意がゆきとどくやうになつたこともその一つです。そして焼夷彈などは少しも恐しくないといふ自信を得たのも

重要でせう。

◇家の中に落ちた焼夷彈をもみ消したり、中には便所の中につき落して消したなんて云ふ話もありました。そしてその後の空襲警報發令に際しても、さすが一度體驗済みであるといふ力強さを感じます。

◇しかし先般の敵機來襲で一番驚き又警戒すべきだと痛感したのは流言蜚語のたぐい입니다。あの日帝都下は實に平靜で、あれがほんとに敵機かね、等と冗談云ふ人さへありました。(こんな冗談がデマの源になります。注意しませう。)それが一步東京を離れ、段々遠くなる程「東京がやられた」とて大變な騒ぎでした。まるで二、三發の爆彈で東京が全滅したやうに云つてゐたデマに腹が立つ位でした。(勿論間もなくこのデマは霧散しました。)

◇吉田枝二郎先生の相變らぬ御指導に感謝いたします。(村瀬)

淨土 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年五月五日印刷納本
昭和七年六月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區板町七

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人遺仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

一ケ年 (送料共)

腦の病・神経系統諸症・神経痛
 腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神経系統諸病、神経病、腦神経衰弱、不眠症
 てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）、兒麻痺（ツケ）、腦
 梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
 逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
 神経性（耳病）、神経性（鼻病）、記憶力減退、
 思考力減退、精力減退、健忘症、性的神経病一
 切、神経性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
 鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
 胃腸障害、便秘症、神経痛、ロイマチス、關節
 炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥	
六日分貳圓	十日分參圓
廿日分五圓	卅日分七圓

全國有名藥
 店、一流百
 貨店ニアリ
 品切ノ節ハ
 直接本舖へ
 御注文下サ
 一

試供藥と
 説明書を

進呈

京都伏見いなり山

謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社 丹平商會分店
 關東代理店 東京 株式會社 丹平商會支店

淨 土

第八卷第六號

（停）定價金十二錢（送料）
 外埠定價金十三錢

昭和十年五月廿日第二種郵便物認可（毎月一回一日發行）
 昭和十七年五月廿日印刷納本・昭和十七年六月一日發行